とらドラ！腐った目の物語

手乗りタイガー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あらすじというより設定を。

時間軸おかしいですが御都合主義で全て通します。

とらどらは高校２年からですが今回は高校入学の時からなので１年生からになります。

１年生から始まりますが大河は北村に中学３年の時に告白されていたという設定にします。

亜美は１年の時点で速めに出します。

目　次

1話「引っ越しは突然に」―――1
2話「逢坂大河」―――6
3話「汚部屋訪問」―――12
4話「空っぽのラブレター」―――18
5話「逢坂大河の依頼」―――22
6話「俺の財布の中身はこうして無くなっていく」―――26
7話「望まぬ出会い」前編―――31
8話「望まぬ出会い」後編―――36
9話「比企谷八幡に出来ること」―――41
10話「雨と亜美」―――46
11話「MAXコーヒーと入学式」―――51
12話「始業式」―――58
13話「嫉妬と亜美」―――61
14話「川嶋break1」―――64
15話「川嶋break2」―――69

1話「引っ越しは突然に」

千葉生まれの俺は小学生の頃から親父譲りの目のせいで虐められていた。

『目が腐っている』そんな言葉は中学に進級した時には慣れてしまっているくらいには言われ続けた。

俺と目を会わせた女子が急に泣き出したのも記憶に新しい。そんな生活も中学3年生の時に終わりを告げた。

中学3年生の卒業式前日。もう少しで中学生活も終わりを告げるように春の知らせをウグイスが鳴き教えてくれる。

春告鳥とはよく言ったものだ。

帰路に着いた俺は、家の庭で鳴いている、ウグイスの鳴き声を聞きながらリビングの扉を開けた。

「ん？」

不思議な光景だった。

普段俺の親父も母親も忙しく家にいない筈なのにリビングに妹の小町を含めて全員集合していた。

しかも雰囲気は重く、一瞬開けた扉を閉めようとしたが親父の「こっちにきなさい」と言う言葉で俺は少しの不安を覚えながらリビングに入った。

ソファに親父と母親、そして小町が対面するように座っており、小町の座っているソファには1人分の座るスペースがある。

恐らく俺も小町の隣に座る為に態々小町が少しズレて座っているのだろう。

俺がソファに座ると最初に口を開いたのは親父だった。

「八幡。お前学校で虐められているそうだな？」

開口一番がそれだった。

虐められていたのは小学生の時からなので別に今更気にすることでもないが親父の迫力に負けて押し黙ってしまう。

「……」

「黙っていては分からんだろう」
「虐めは前からあったから別に今更気にしてない」
正直の気持ちを言ったつもりだった。
前からあったしその延長で現在も続いているだけで別に今更気にしていないと。
「・・・・ そうか。いつ頃からあったんだ？」
少し口調が優しくなり、俺の緊張も少し解れていく。
「何時ってのは覚えてないけど・・・・ 確か小学生の2年生の時くらいだった気がする」
確か隣の席の女の子が消ゴムを落としてそれを拾ってあげたら何故か泣かれて、その後クラスメートにリンチにあったのが最初の筈だ。
「そんなに早くから・・・・・・ ごめんなさい・・・・ わたし」
母親が何故か涙を流しながら俺に謝ってくる。
でも俺は何故謝られているのか分からない。あの時虐めていたのはクラスメートであり母親ではないのだ。それに毎日いるときはご飯を作ってくれ、俺と小町の為に働いてくれている。それが事実であり感謝こそしても謝られることは無いと思っている。
「お前のせいじゃない。俺も家をあけすぎたのが原因だ。家族の時間を取らなかった俺の」
「・・・・ またあなたはそうやって・・・・」
なんだろう、このまま家庭崩壊とかないよね？小町は一言も話さないし、あれ？これって俺が原因で離婚とかそういうアレな展開？
「ちょ、ちょっと待ってくれ。確かに虐めは受けていた。でもそれは親父や母親のせいじゃない。むしろ今まで俺と小町の為に働いてくれて感謝してる。学校での事は俺に責任があるんだろうし、それに友達も欲しいとは思ってない。今では虐めも気にならないし気にしないでくれ」
「お兄ちゃん・・・・」
小町がやっと口を開いて俺の名前を呼ぶ。声に覇気はないが喋らないで顔を青くさせている小町なんて俺は見たくない。

「この言い方・・・・ あなたそっくりね・・・・」
「そうか？」
「ええ、自分の事なんかより相手の事を第１に思えるところ・・・・ わたしが惚れたところでもあるけど・・・・ その生き方はとても辛く理解してくれる人は現れるかどうか分からない。そんな辛い中で息子をいさせたくない・・・・ だから引っ越すことにしたのよ」
は？

・・・・・・・・・・・ おい、今俺の母親は何て言ったんだ？
やけに胸にくる言葉を言われたと思ったら引っ越すだと？
千葉から？いやいやあり得ないだろ。
俺の私服姿見たことないの？
大きくＩ　ｌｏｖｅ千葉！って書いてあるんだよ？この意味わかるでしょ？
「いや引っ越すなんて大袈裟な・・・・ それに試験だってもう受かってるんですけど？」
そうなのだ。
俺は来年から総武高校と言われる、意外と偏差値高めの高校に入学が決まっているのだ。
数学以外は完璧な俺が数学を真面目に努力してなんとか受かったんだよ？それを無しにとか勘弁してもらいたい。
「大丈夫。お前の成績を見せたら先方の高校の校長が許可を出してくれた。実は父さんの顔が利く高校でね。校長とも結構長い付き合いなんだ」
良く思うが俺の両親って意外と顔が広い。
それも結構大物が多いのだ。いろんな意味で。
「小町はそれで良いのか？」
「小町から言い出した事なんだよ」
え？俺は隣に座っている小町を見ると真っ直ぐ目があった。
「お兄ちゃん・・・ あのね、お兄ちゃんの事小町のクラスでも有名なんだ・・・・ 皆お兄ちゃんの悪口言ってる」

そうか……　小町には迷惑をかけていたんだな…。それもそうか、同じ学校に通っているんだから噂も立つだろうし陰口とか言われていたのかもな……。
「悪かったな小町……　俺のせいで小町にまで嫌な思いをさせちゃったみたいで」
「ほんとだよ…　小町の事は何も言ってこないけど、お兄ちゃんの事を悪く言われるのは小町嫌だよ」
……　流石次世代の高性能ボッチだ。
基本他人との付き合いを嫌う小町だが、小町は人付き合いが非常に上手い。
顔が俺に似ずに可愛いというのもあるが一番はその人懐っこさだろう。
誰にでも優しく、誰にでも笑いかける小町は本当に凄いと思う。
俺は他人との距離感を取るために態々相手が嫌がることを言い距離を離す。他人の事なんて信じられないのだから当たり前だと思っている。
故に俺はボッチである自分を愛し胸を張ることが出来る。
ボッチであることで弱くなることはない。
ボッチであることで卑屈になることもない。
ボッチであることで周りの奴等には無い強さを得ることが出来ると思っている。
「でも小町だって中学校を転校することになるんだぞ？」
「あ、それなら問題ないよお兄ちゃん。小町なら何処でもやっていけるから♪」
いつもの笑顔が小町に戻り安心しながらも現状のままだと本当に引っ越すことになりそうなので策を練ることにする。
「小町なら問題ないだろうな……　俺達が新しく住む場所ってどこなの？」
「三重だ」
なん…　だと？三重だと？いやいやいやあまりにも遠すぎませんか？ここ千葉だよ？何故三重？

確か４００キロ以上も離れてるぞ？
「どうしてそんな遠いところに？」
「遠くなければ意味がないだろ？中学の時のクラスメートと会わないようにするんだからな」
親父の言っている事は尤もな事なのだろう。
俺が望んでいる事ならばだ。
だが俺は別に引っ越しなんて望んじゃいない。千葉に住んでる人間は嫌いだが、てか何処の奴も変わらないと思うし。だが俺には、たった１つの心の癒しＭＡＸコーヒー、通称マッカンがあるのだ。千葉限定のマッカン。恐らく三重にはないだろう。
現実は何処でも苦いことばかりなのだ。せめてコーヒーくらい甘くても良いだろうに。
そのコーヒーすら苦くなってしまっては俺の癒しが無くなってしまうではないか。
「だ、だけどさ。ほらお金かかるし」
「金のことなら心配するな。今まで伊達に家にも帰らずに働いていたわけじゃない」
どうやら金はあるらしい。それなら俺のお小遣い増やしてくれよ！
こんなときに友達と別れると悲しいと言えれば良いのだが生憎俺に友達はいない。
それにそれがそもそもの問題になっているのだから嘘もつけない。
俺は最後に一言だけ両親に言うことにした。
「三重にもマッカンてあるかな？」

2話「逢坂大河」

翌日。
俺は両親の話を聞いてからまだ16時間程しか経過していない事を理解できないでいる。
なんせ今俺は三重にいるからだ。
というか金あるとか言ったわりに借りたマンションが汚い！狭い！危ない！の三拍子揃ってそうなマンションだった。
しかも隣にどどーん。と効果音が鳴り響きそうに立っている高級マンションのせいで陽当たりは最悪でカビルンルンパラダイスなのだ。
こんな不健全な場所で小町が病気にでもなったらどうするつもりだったのか・・・・ 親父に問いただすと。
「急いでて近くに空いてるマンションここしか無かったんだよ。まっ暫くしたら普通のマンションに引っ越そうと思ってるからそれまで我慢してくれ」だそうだ。
そして今日からさっそく仕事ということで小町と一緒に家の大掃除が始まった。
マスクよーし！水泳ゴーグルよーし！手袋よーし！よし始めるか。
にしても部屋は酷いものだった。
床は腐ってはいないが彼方此方にカビが繁殖しており胞子が出ている。
正直？ウシカの世界かよとか突っ込みたくなったほどだ。
最先端の技術を試用した、カビバスターや洗剤を使って部屋を隅々まで綺麗にした。
部屋じたいが狭いので小町と二人でも夕方には終われそうだ。
時刻は昼を過ぎたのか小腹が空いてきた。
小町を見ると目で訴えて来ているのが分かる。
「なんか外に食いにでも行くか？」
「おっほー！お兄ちゃん分かってるぅ！今のは小町的にポイント高い

よ！」
「はいはい」
俺と小町は手を洗い適当に着替えて近くのサイゼリアまで歩いて来た。
店の中に入るとお客さんはかなりおり、後は店の入り口付近のテーブルが1つしか空いていなかった。
「ギリギリセーフだったねーお兄ちゃん」
「ああ、そうだな。後少しでコンビニ弁当になるとこだった」
「うへーそれは嫌だなぁ」
小町は本当に嫌そうな顔をしながらメニュー表の一番後ろを開く。
何故女の子はデザートから選ぶ人が多いんだ？
いや、小町以外の例なんて知らないけどさ。
「んーとそれじゃあ」
ウィィィンと店の入り口が開く音がして目を向けると小さな女の子が空いている場所を探しているのかキョロキョロしていた。
身長は見る限り１５０㎝ないくらいだろう、中学1年生くらいかな？ふんわりとした長い髪でかなり可愛い顔立ちをしている。
店の人が気付いたのか女の子の元に行き話をしている。
「申し訳ございません。ただいま席は埋まってしまっておりまして・・・・」
「そうですか・・・・・　分かりました」
女の子は肩を落として後ろを振り返り店から出ようとする。
俺はあまり気にせず目の前でメニュー表を見ていた小町に決まったかと聞こうとしたがいつの間にか小町の姿は無かった。
「ま、待ってくださーい」
え？まさかと思い店の入り口を見ると小町が先程の女の子を止めていた。
「何？あんた誰よ・・・・」
「私は比企谷小町と言います。それでもし良ければなんですが一緒に食べませんか？席二人じゃ広いですし、一人くらい増えても構わないので」

あの子なに言ってるのん？てか女の子とおもいっきり目が合っちゃったんだけど・・・　直ぐに目そらしたけどな。
あー俺の人生は終わったのかもしれない。
「ブクシュン・・・・　じゃあ遠慮なく」
いやそこは遠慮しろよ。今完全に俺と目があって気まずい雰囲気になったでしょ？（主に俺が！）
小町は女の子の手を引きながら戻ってきて俺の前に座る。
「えーと・・・・」
「あ、お兄ちゃん、一緒に食べることになったけど良いよね？名前は・・・　あ、名前まだ聞いてなかった」
「私の名前は逢坂　大河、よろしくね」
意外と素直に自己紹介を始める逢坂さん。
「俺は比企谷八幡だ」
「ふーん・・・　兄弟なんだ。似てないわね」
ほっとけよ！悪かったな妹は可愛くても俺はこんな顔で！俺だって目が腐ってさえなければ他はわりと良いはずなんだよ。
「兄弟って言っても双子じゃないんだ、別に良いだろ」
「悪いなんて言ってない。ただそう思っただけ」
「そうかよ・・・」
てか睨むなよ・・・　怖いだろ。
小さいくせにやたら迫力あるんだよ。
「小町これにきーめた！大河さんはどうしますか？」
小町がメニュー表を逢坂に渡そうとするが決まってるから大丈夫と言ってのを聞くと小町は呼び出しのボタンを押した。
あれ？小町ちゃん？お兄ちゃんまだメニュー表見てないんだけど？いや毎回どうせこれ頼むんでしょ？みたいな感じになってるけどさ聞かれないってなると寂しいんだけど？
「小町のお兄さんは良いの？」
逢坂、意外と良いやつなんじゃないのか？・・・　やばい目から汁が出てきた。
「あーいつも同じなんで良いんですよー。それより大河さんは何を頼

むんですか？お兄ちゃんはミラノ風ドリアですけど」
　ふふふ、我が妹よ甘いな！今回は違うんだよ！別に聞いてくれなくて態々変えたとかそういうのじゃないから！
「チーズドリアだ（にしようかなって）」
　……。
　やっちまったぁあああ!!
　なにやってんの俺！気まずいことしてんじゃねーよ！いつも通りミラノ風ドリアで良いじゃねーか！ばーかばーか！
「およよ、お兄ちゃん珍しいね。大河さんもチーズドリアと」
「何？」
　俺と頼んでしまった物が同じとか下手すりゃ泣かれると思って逢坂を見ると、なんでもないように首を傾けてきた。
「い、いや別に…」
　俺の反応が面白かったのか小町はお腹を抱えて笑っている。
　家に帰ったら覚えとけよ……。
　そのあと数分でチーズドリアと小町が頼んだジャンボパフェがきて食べ始めた。
　てか小町はパフェだけ頼んだのか……。
　余談だが５０㎝程の巨大なパフェを目をキラキラ輝かせながら完食した小町を見て俺は引いて逢坂は食べたそうにしていた。
「逢坂も食べたいなら注文していいぞ？」
「べ、別に食べたくなんてない」
　メニュー表を見つめながら言われても今一説得力がない。
「それに…　今月はもう節約しないとだから」
　節約？
「なあ逢坂の両親とかってどうしてるんだ？」
「私は独り暮らしだから仕送りで暮らしてる。それに一人でも困らないし」
　そう言った逢坂からは哀愁が漂いどこか俺と重なって見えてしまう。
「まっ、家族なんて最も近い他人みたいなもんだからな」

「もう！お兄ちゃんはすぐそういうこと言うんだから。大河さん気にしないでね？」
「ううん。私もそう思うし」
やっぱりだ。今の顔も俺には見覚えがあった。
何度目かの虐めをされた時、俺は初めて皆から虐められている事を自覚した。
俺だけは虐めの中には入らないだろうと幼い頃から思っていた俺だが、いざ自分が虐めを受けると自分自身が自覚したくないのか自分は虐められていない。自分が虐められる筈がないと思うようになっていた。
だから先生に虐めに関して聞かれても虐められてませんと答えるし、自分から虐められてます、という意思表示をしない。だって虐められていると思っていないのだから当然だ。
だが一度虐めを自覚してしまうと軽い虐めでも意識してしまい、大きな虐めも小さな虐めもあまり変わらなく心に突き刺さる。
だがこの頃には既に遅い。
周りの誰にも頼ることはできないのだ。
虐められるということは友達も離れていくということだ。俺と一緒にいれば自分が虐められるかもしれないと、皆離れていく。
本当人間は事故中心的で怠惰な生き物だ。
俺自身も同じだが。
一度虐めを否定すると先生や大人にも相談出来なくなってしまう。
心にまるで何かが引っ掛かっているように虐められていますという言葉が出なくなるのだ。
言ってしまうのが怖くて怖くて仕方ないのだ。
それは親に対しても同じだ。いやそれ以上かもしれない。
親に心配をかけたくないというのは子供心に抱く意地なのだろうか、それとも只自分でなんとか出来るという欺瞞なのだろうか。
そんな時の俺に逢坂は似ている。
親に頼れない、友達にも頼れない何かを抱えている。
だが他人が簡単に踏み込んで良い領域ではないことは分かる。実

際に俺だったら踏み込んで来てほしくない。むしろ話しかけてほしくないまである。
だから何も聞けないし聞かない。
結局逢坂は、パフェを頼むことなく会計をして帰ることになった。
「あ、そう言えば大河さんって何処に住んでるんですか？ この近くですか？」
小町が逢坂に詰め寄って聞いている。
ほんと小町ってコミュ力高いと思う。俺のコミュ力まで持っていったの？ ってレベル。
「すぐ近くよ、この近くのマンション」
「この近くならうちとも近いかもしれませんね！ 途中まで一緒に帰りませんか？」
「いや流石にそれは」
「私は別に構わないわよ」
「では行きましょう！」
小町は逢坂が気に入ったようで笑顔で手を引いて帰路に向かう。
逢坂は戸惑いながらも嫌ではないのか小町の手を振り払おうとはしない。
こんな光景も――――――――。
「悪くないな」

3話「汚部屋訪問」

「なん・・・・ だと？」
　サイゼリアで会った逢坂という女の子と小町が原因でご飯を食べることになり何故か途中まで一緒に家に帰ることになった・・・・なったのだが。

「おいおい・・・・ 冗談だろ」
　俺は自分の新しい住居になっているマンションの前で呆然と立ち尽くしている。
「大河さんがお隣のマンションだなんて小町嬉しいですっ！」
「お、落ち着きなさいって・・・・ でも私も驚いた」
　小町は嬉しさからなのかピョンピョン飛び跳ねてるし・・・・。
「あ、そうだ！大河さん、良ければ今夜うちにご飯食べに来ませんか？」
　小町がとんでもないことを言い出しやがった。
　家が隣の時点で言うとは薄々思っていたが・・・・。
「え？良いの？」
「勿論ですよ！うちの両親あまり家に帰ってこないので兄と小町しかいないので平気です！小町腕によりをかけてご飯作りますよ！」
　こうなった小町を止めるとあとがめんどくさいしなと、俺は既に諦めモードである。
　別に自分の部屋から出なければ迷惑にもならないだろう。
「それじゃ、後でお邪魔するわ」
「はい！それでは後で来てくださいね！」
「うん、あとでね。・・・・ あんたは黙ってるけど何か言いたいことでもあるの？」
　女子の楽しいトークに入らないように静かにしてたのにどうして俺に聞いてくるんだよ・・・・。
「いや何も。むしろ何も考えていないまである」
「ふーん。なんか変わってるわねあんた」

お前にだけは言われたくねぇ・・・・。
逢坂と一旦別れた俺と小町は部屋の掃除を再開した。今の時間は1時なので夜ご飯までらまだ5時間程余裕がある。掃除も後は風呂とトイレを残すのみだ。
ご飯の仕度も問題なく出来るだろう。
「それじゃあ掃除を再開するか。小町は風呂掃除とトイレ掃除どっちがいい？」
「トイレ掃除を頑張るでありますっ！」
敬礼しながら完全装備した小町がトイレに向かっていった。
トイレの方が狭いので掃除する量は少なくてすむから選んだのだろう。その辺の頭の回転は流石だと思う。
「さて俺も始めますかね」
カビとヌメりと格闘すること2時間。ようやく綺麗になったことで居間に戻ると完全装備の手袋だけ外した小町が漫画を読みながら笑っていた。
ふぅ・・・・・・ていっ。
「痛っ！お兄ちゃん・・・・ははは見付かっちゃった」
それで隠れているつもりだったのか？居間の真ん中で漫画を読んでるとか隠れる気さえ皆無だろ。
「見付かっちゃったじゃないだろ。トイレ掃除は終わったのか？」
「いやーそれがね・・・・ほ、ほら中々手強くて」
「終わってないんだな？」
「・・・・・・・てへ♪」
あー今回ばかりは本気でムカつくな。
「どうするんだよ、夜ご飯まで後3時間くらいしかないぞ？スーパーにおかず買いに行かなきゃならないし」
「あはは・・・・あっそうだお兄ちゃん！小町一人で掃除してるから、大河さんの所に行って二人で買い出ししてきてよ」
いやどうしてそうなるんだよ。閃いたみたいな顔してるなよ。
「意味が分からないんだが？」
「ほら大河さんの好き嫌いとか分からないでしょ？だから次いでに嫌

いなものとか聞いてきてよ」
「それなら小町が行けよ。俺が掃除やっておくし」
「ちっちっち。ここは小町の担当なのです。だからお兄ちゃんはお兄ちゃんのやるべきことをやってください」
八重歯を出しながら人指し指を立てながら、ちっちっちとする小町に本日2度目のチョップをする。
ていっ。
「痛っ！お兄ちゃんこれ以上小町の身長が伸びなかったらお兄ちゃんのせいだよ！」
「いやいやそんな事で成長はとまんねーから」
「ともかくお兄ちゃんは早く行ってきて！」
「やだよ・・・ めんどくさいし。それに逢坂さんに迷惑だろ？」
俺みたいな男が訪ねてくるとか絶対嫌だろう・・・ てか呼び鈴鳴らして入って帰れとか誰？とか言われたら間違いなく泣く自信ある。
「大丈夫大丈夫。ほら早く」
「小町ちゃん。お兄ちゃんの心は意外と繊細でナイーブなんだよ？」
「ナイーブ？はぁ？ナイーブナイーブってやたらと使うやつに限ってナイーブじゃねーんだ。だいたいお兄ちゃんの心がナイーブなわけあるかよ」
「小町ちゃん。何その言葉使いお下品よ」
「お兄ちゃんの真似だよ」
「うっ・・・ 似てねえだろ」
「まっともかくさ。結局お兄ちゃんは小町の言うことに逆らえないんだしさ早く行った方が良いと思うよ？」
「はぁ・・・ 分かったよ」
俺は気乗りしないが小町に逆らっても良いことはないので隣のマンションに行くことにした。
「お兄ちゃん。大河さんの部屋は2階って言ってたから表札探してね」
「・・・・ ああ」
俺は逢坂の哀愁漂う顔を思い出しながらマンションのエレベー

ターに入り2階のボタンを押した。
「独り暮らしって言ってたが‥‥‥ いや止めておこう」
人の悩みなんてそいつの問題で他人が分かったように勝手に考えたりするのは筋違いだ。
俺は首を降ることで考えを止めて逢坂と書かれた表札を探した。
表札は直ぐに見付かり呼び鈴を鳴らす。
ガチャっと半分だけ開かれたドアからちょこんと顔を半分だけ覗かせた逢坂が出てきた。
「なんだあんたか」
機嫌が悪いのか分からないが目が鋭く迫力があり気後れしそうだ。
「お、俺で悪かったな。誰か待ってたのか?」
「別に待ってないし、どっちでもいいでしょ?それでなんのよう?夜ご飯まではまだ時間あると思うけ‥‥‥ はっ‥‥‥」
「は?」
「はっ‥‥‥ ぶくしゅ‥‥‥」
「うっ‥‥‥ 取り合えずティッシュ使うか?」
「‥‥‥ 使う」
鼻をかませてようやく話を戻そうと思ったがやけに中から臭ってくる生ゴミの臭さに鼻が曲がりそうになった。
「あ、逢坂さん」
「何よ」
「掃除とかってちゃんとしてるのか?」
「掃除は苦手なのよ」
‥‥‥‥‥‥‥。
よし帰るか。
小町ごめん‥‥‥ お兄ちゃんにはハードルが高すぎたよ。
「そ、それじゃあな。急にお邪魔して悪かった」
「ちょっと待ちなさいよ。今あったことを小町に話すつもりでしょ?」
「いや話さねえよ‥‥‥」
「信じられないわ。だから‥‥‥」

逢坂は何処に隠していたのか木刀を取り出した。
「は？」
意味が分からない俺は硬直である。
「今からあんたの記憶を消す。こいつで脳天ぶったたけば死にはしなくても記憶くらいなら無くせるだろうさ」
「いやいやいや意味わかんねえって。確かに人を信じられないのは俺も同じだ。赤の他人なら尚更だ。だがそいつを木刀で叩くってのはおかしくないか？」
「こんな掃除が出来ない高校生だなんて知られたくないの・・・・ 知られたら死ぬ・・・・ でも死にたくない。だから・・・・ 死なないためにお前の記憶を無くさせる！」
無茶苦茶な理論だ・・・・ つかなんだよ・・・・ 俺が何したんだよ。てかこいつ高校生だったのか？・・・・・ いやどう見ても小学生。よくて、中学生にしか見えん。
木刀を突きだし迷わずに俺の顔面に向かって突き刺す。
頬を掠めながらもなんとか避けたが木刀は曲線を描き俺の左肩を強打した。
「痛っ・・・・」
「あんた今。こんな小さい高校生がいるはずない。とか思ったでしょ？」
顔を俯かせながら聞いてくる逢坂、声のトーンは低く怒っていることがわかる。
「べ、別に思ってねーし・・・・ てか本気で殴りやがったなお前！」
「当たり前じゃない。それにまだ記憶は消せてないんだから終わりじゃないわよ！」
木刀を構え直し今度は振りかぶってそのまま勢いよく俺の頭を狙ってきた。俺は先程の恐怖心から逢坂の脇を潜ることでなんとかかわして家の中に逃げ込んだ。
外に逃げ場はないし、1階に降りる方法はエレベーターのみ。この方法が最善だと思った。
だがこの選択が後々の俺のボッチライフを狂わすことになるだな

んて思ってもみなかった。

４話「空っぽのラブレター」

逢坂から逃げて部屋に入った俺はまずリビングに入って体が硬直した。

洗面台だろうか？恐らく洗面台なのだろうスペースの所は生ゴミとカビとよく分からない物で溢れ返っていた。これがテレビなら間違いなくモザイクが掛かっているだろう。

そしてこの強烈な異臭。

思わず両手で鼻を塞ぐ。

先程サイゼリアで食べたチーズドリアをリリースするのをなんとか堪えて逃げ場を探す。

「大丈夫・・・・ 安心しなさい」

後ろからゆっくり足音が聞こえてきて振り替えると逢坂が木刀を肩にトントンとまるで俺を殴る予行演習のようにしながら歩いてくる。

「この状況で安心出来るのは仏かよっぽどの馬鹿だけだ」

「ならあんたも仏になりなさいよ。悟りでもなんでも拓けば良いじゃない・・・・ そして大人しく私に殴られろコラァアアアア!!」

足に力を入れて逢坂は飛びかかってくる。迫力はさながら獲物を狙う猛獣のようだ。

俺だって痛いのは厭だ。全力で逃げる、そして辿り着いたのは逢坂の寝室だった。扉に鍵がついていたのでロックしてなんとか逃げ切れた、と深呼吸をする。

「あけろぉぉぉ!!」

ドンドンと扉が叩かれるが開く気配はない。逢坂だって自分の部屋の扉は壊したくはないだろう。

それにしても・・・・ すごい部屋だな。

「でも・・・・」

見た目は広くベットもお姫様が使うの？ってくらいに大きい。そして乱雑に脱ぎ捨てられた衣服。なのにどうしてだろうか、生活感が

ない。いや汚れてるし俗に言う汚部屋なんだが何て言えば良いのか・・・・ 小さい子供が遊ぶ人形の部屋って感じで人間味が無くてどこかおかしい。何故かは分からないけど嫌悪感に襲われて気持ちが悪い。

「・・・・・・」

扉に体重を預けて寄りかかる。この部屋を見ていたくなかった、なんだこの部屋は・・・・ どうしてこんな部屋に・・・・・・。

異臭とは別の意味で吐き気に襲われた。

「うっ・・・・」

俺が吐き気に襲われてると扉の外から足音が徐々に近付いてくるのが分かった。

だか分かったときには既に遅かった。

「私の部屋で何してんだぁあああ!!この変態！駄犬！」

逢坂が扉を蹴破って俺はすぐ近くに置いてあった棚に頭をぶつけた。

「痛っ！」

「はぁはぁ・・・・ あ、ああ、あんた・・・・ なな、何を持ってるのよ・・・・」

逢坂の声は震えているが今は後頭部を棚の角にぶつけたため構っている余裕はない。

くしゃっ。

「くしゃっ？・・・・」

何かを潰した音を聞いて、その音の発信源に目を向けると俺の左手に何かが握られていた。

ピンク色の封筒のようなもので北村君へ。と書かれていた。

これは俗に言うあれでは・・・・・。

「私のら、ラブ・・・・ らら、ラブラブレターを見て潰して・・・・」

逢坂の体が震えだし俯いていた顔を上げて真っ直ぐ俺を睨み付けた。

このままでは絶対木刀で殴られる、そして悪ければ死ぬ！考えろ！今この状況で尤も有効で話を別の方向に持っていける内容を。

駄目だ思い付かん。てかラブレターなんて書いたことも貰ったこ

ともない俺がこの状況の打開策とか思い付くわけない！最初に触ったラブレターが他人のとか笑えないわ！
「・・・・ 何ぶつぶつ言ってるのよ・・・・ まぁいいや、今から殴るから動くんじゃないわよ？」
「い、いや誤解なんだよ。話をまず、話を聞いてくれ」
「うるさい！うるさい！話なんて聞く必要がない！」
「ここで嘘や欺瞞を言うつもりはない！でも逢坂が俺の話を聞いて納得いかないのなら素直に殴られる、それでいいだろ？」
「・・・・ 分かった、聞いてあげる。その代わり納得いかなかったら・・・・」
「分かってる・・・・」
　逢坂は木刀を右手で掴んではいるが下ろして一応聞く体制は作ってくれたようだ。
「まず初めに俺が逢坂の家を訪ねた理由だ。実は小町から夜ご飯のおかずを買いに行くように頼まれたんだが逢坂の好き嫌いが分からないから一緒に買いに行けと頼まれたんだよ」
「・・・・ あんたが態々一人で私の家を訪ねるような性格に見えないんだけど？」
　意外と見てるんだな・・・ 少し感心してしまう。
「ああその通りだ。だからこそこの言葉は信憑性があると思う。俺は小町に頼まれたんだ、な？分かるだろ？」
「いや意味分からないんだけど・・・・ シスコンってこと？」
「いや違うから何故そういう結論に至ったんだよ。俺は小町に逆らえないんだよ」
「やっぱりシスコンじゃん・・・・。で、私の家に来た理由は分かったけどら、ラブレターの中を見たことの説明にはなってないわよね？」
「ああそうだな。確かに関係ないな。ここからが本題だが、このラブレター中身入って無いんだけど」
「へ？」
　いやいや、へ？じゃねーよ。俺も潰した感じで何も入ってないの分かったんだけどこれってあれだろ？

「つまり入れ忘れ。だろ？良かったじゃねーかよ、このまま渡してたら気まずいどこの話じゃねーしな」
「あ、そう言えば隣の部屋の机の引き出しに入れっぱなしかも・・・・」
「はぁ・・・ これで納得してくれたか？」
「・・・・ 納得した。でも部屋のこと小町に言うかもしれないし」
「だから言わねーって！」
そんな事言ったら掃除兄にも手伝わせますから！終わるまでこきつかってください！って笑顔で言うのが目に見えてる。
もう掃除はごめんだ。
「でも私だけ弱味を握られてるみたいでフェアじゃないし」
何に対してフェアじゃないんだよ・・・・。もう意味わかんねーよまじで、リスクリターン考えてる暇があるなら現状の状態をもう少し考えろよ、最早お前に不利益はない、むしろ俺にとっての不利益しかないまである。
「ねえ、あんたはさ・・・・ 人を好きになったことってある？」
「は？」

5話「逢坂大河の依頼」

「ねえ、あんたはさ・・・・・ 人を好きになったことってある？」
「は？」
ブーンと外からバイクが通り過ぎる音が聞こえるなか俺の思考は固まっていた。
「だから人を好きになったことってある？って聞いてるのよ！さっさと答えなさい！」
木刀を俺の顔に突き出す逢坂。
「・・・・・ だから直ぐに人に木刀を向けるなって・・・・」
人を好きに・・・・ ね。
そんな事今まで考えたこともなかった気がする。確かに可愛いや、綺麗だなと思える人はいたがそれが好きなのか、と問われても俺は違うと答えるだろう。
「私は、ね。たぶん今恋してるんだと思う。その人の事を見ると胸が爆発するんじゃないかってくらいドキドキするし、お話したいとも思う」
いきなりしおらしくなって頬を朱に染めながら言葉を紡ぐ逢坂は俺にはとても眩しく見えた。
「でもね・・・・ いざ話すとなると何を言えば良いのか分からなくなるんだ・・・ 挙動不審になって言葉はカミカミ自分で言ってて自分に腹が立ってくる。聞きたいこと、伝えたい事が沢山あるはずなのに、いざ言葉にしようとしても言葉が見付からないの・・・ ねえ？これって恋、だと思う？」
「・・・・ さあな。俺に恋なんて分からないししたこともないしな。それに恋なんて人に聞くもんでもないだろ？いや知らんけどさ」
「何よそれ、折角聞いてるのに」
「だってそうだろ？考えてもみろよ。他人が自分の事を知った風に自分の事を語るんだぜ？意味わかんねえだろ？それこそ信用できないし、勝手に知りもしねえで俺の事を語るんじゃねえよって俺は思う

ね」
　まっそんな事言ってくれる友達もいないから一生縁の無い事なんだけど。
　仮にあったとしても俺は一生ごめんだ。
「ふっ・・・ そうね、そうかもしれない。ねえ、私はこれからどうすれば良いんだと思う？」
「知らねえよ。どうすればなんて人に聞くなよ。自分がどうしたいか。だろ？」
「私は・・・ 北村君に告白したい・・・・」
「そうか」
「うん。だから手伝って」
「は？」
　おかしいな・・・ 幻聴かな？
　俺は自分でなんとかしろって遠回しに言ったつもりだったんだが・・・・。
「は？じゃない。だから私が北村君と付き合えるように手伝えって言ってるのよ。ちゃんと聞いてなさいよね」
「どうして俺が？」
「だって私がどうしたいか、なんでしょ？私は北村君に告白したいし、手伝って欲しいとも思ってる。それで今回の事はチャラにしてあげる。八幡」
「っ！」
　はぁ・・・・ 恋愛の神様は何がしたいんだろうな。
　恋愛の経験なんて今まで無かった俺に恋愛の手伝いとか・・・ 本当に・・・ でもこんな笑顔でお願いされたら断れねーじゃねーか。
　これは逢坂の笑顔に引かれたとかではない・・・・。きっとお兄ちゃんスキルが自動的に発動して放って置けないと思った結果に過ぎない。
「これからよろしくね、八幡」
「あ、ああ」
　そう言えば女子から名前呼びにされたのなんて何年ぶりだったっ

け。

木刀で殴られずにすんだ俺は逢坂と一緒に近くのデパートに来ていた。

「逢坂は好きな食べ物とかあるのか？」

「カレー！べ、別に辛くても大丈夫だけど八幡が甘い方が良いって言うなら甘口でも良いわよ」

どうやら逢坂は辛いものが苦手なようだ。

見た目と相まって本当に中学生くらいにしか見えん。

「そうか、それじゃあ甘口にしような。なあ、逢坂って今高校何年なんだ？」

「ん？ああ今年から大橋高校に入学するのよ」

ふーん、大橋高校なんて高校があるのか、てか俺は何処の高校に行くことになるのだろうか1か月後には始業式が始まるらしいし帰ったら親父にでも連絡して聞いてみるか。制服や必要な物は揃えてくれるとは言われたが高校の名前が分からないと場所も分からなくて色々と不便だ。この辺りの道もよく分からないしな。

「それであんたは？」

「ああ、俺も高校に今年から入学するんだよ」

「へえ。それじゃあ同じ年なのね」

そうなるのか・・・・。

てかよく考えてみれば同じ年の女の子と買い物とか・・・ ボッチの俺には刺激が・・・・。

ん？何を今更って？今までは見た目と言動が相まってどこか妹感覚で接してたんだよ。

「そうなるのか・・・・ なあ逢坂。もう少し離れて歩いた方がいいぞ」

俺はカートを押しながら逢坂は、そのすぐ隣を歩いているのだ、端から見ればそう見られてしまうこともあるだろう。

「？どうしてよ」

「一応俺も男だ。男女で歩いてたら誤解されるだろ？友達とか噂にな

るの嫌だろ？しかもこんな目の腐ったようなやつと」
「別に気にしないわよそんなこと。それよりも次は肉よ！カレーで一番大切なお肉を選びに行くわよ！」
「……」
逢坂の言葉に驚きその場に暫く止まってしまう。今までは俺が言わなくても俺から離れていったのに逢坂は気にしないと言った。
ちょろいと言われればそれまでだが俺自身かなり嬉しかった。……だと思う。
「……あんまり高いのは買えないからな」
その後国産和牛に手を伸ばした逢坂の腕を掴み数十分格闘することになるのだがこの状況を何処か楽しんでいる俺がいた。

6話「俺の財布の中身はこうして無くなっていく」

無事国産和牛ではなく、豚肉の小間切れを買って家に向けて歩を進める。

考えてみればかなり時間がかかってしまった。最初はただ逢坂の好物を聞いて俺だけで買いに来てもいいと思いながら逢坂の家に行ってみれば異臭はするわ、木刀で殴られるわ、ラブレターを見付けてしまい、何故か告白を手伝う事になるわで時刻は午後6時になっている。

辺りは既に暗くなり、店の灯りや外灯の灯りで明るくなっている道を見て引っ越して来たんだと改めて感じる。

Ｐｒｒｒ。と携帯から着信音が鳴り携帯に出る。

「もしもし」

［あ、お兄ちゃん？時間かかってるけど何かあったの？］

電話の相手は小町だった。俺の携帯の番号を知ってるのは家族しかいないので分かってはいたが。

帰りが遅い俺の事を心配して連絡してくれたのだろう、この行動は八幡的にポイント高いぞ小町。

「誰から電話？」

「ん？ああ、小町だ。帰りが遅くなったから心配してかけてきたんだよ」

「・・・　あんたもしかして、さっきの事言うつもりじゃないでしょうね？」

「いやいや言わねーから」

［ん？お兄ちゃんどうしたの？］

「いや何でもない。ちょっと仕度に手間取ってな。ほら逢坂も女の子だし、女の子は仕度とか色々大変なんだろ？」

［ふむふむ成る程ね～］

小町の声はどこか含みのある声で気になったが聞いてはいけない気がした。

「他人の事なんてどうでも良いって言ってたお兄ちゃんが女の子の事を語るとはね～」
「・・・・ 別に語ってねーよ。変なこと言ってると逢坂に小町の恥ずかしい想い出話しちまうぞ」
［ふーん。お兄ちゃんがそうくるなら小町も全部話しちゃおうかな！］
電話越しなのに小町がどや顔で無い胸を張っているように感じるほど自信満々に言ってきた。
「な、なにをだよ」
別に俺がボッチだったことを話されても俺は痛くも痒くもない。だってボッチ崇拝してるし、むしろボッチで良かったまである。
［お兄ちゃんの部屋のタンスの一番下に上げ底になってる部分があるんだけどそれを剥がすと一冊のノーt「すいません、すいません・・・本当にすいません。俺が悪かったからまじで勘弁してくれ」］
その場で土下座したわ。周りの目なんて気にしてられない。てかなんで小町そんなこと知ってんだよ！俺の黒歴史を・・・・・。
［それじゃあお兄ちゃん、帰りにケーキもよろしくね♪小町はモンブランが食べたいでありますっ！］
はっはっは・・・・ こうやって俺の懐事情は苦しくなっていくんだな・・・・・。
俺は地面から立ち上がり電話を切りポケットにしまった。
「はぁ・・・・」
「・・・・ どうしたのよ」
「なあ逢坂・・・・ お前は何のケーキが食べたい？」
「え？」
その後、頼む。理由は聞かずにケーキを選んでくれと半泣きで逢坂に言い、ケーキを自分の以外買った俺は逢坂と共に帰路に着いた。
時間も時間だからと、そのまま家に来てもらったのだ。
「お兄ちゃん待ってたよ！小町心配で心配で！あっ！今の小町的にポイント高い！」

「お前が心配してたのはケーキだろ。ほれ」
「流石お兄ちゃん！当たりだよ！」
「私も買ってもらっちゃって良かったの？」
「ああ。むしろ逢坂の買ってこなかったら家に着いた時点でもう一度買いに行かされるからな」
「あれ？お兄ちゃん自分のは？」
「懐が寂しくてな…　気にせず食べてくれ」
　ここで普通なら半分ずつ食べる？とか言うと思うだろ？だがその考えは甘い。小町は「そっか」だけ言って冷蔵庫にしまいにいったからな。
「にゃー」
　我が家の愛猫かまくらが俺の足にすり寄ってきた。
　可愛いと思うかもしれないが甘いな、うちのかまくらはそこらの猫とは違う。
「悪いな、かまくら。今日は何も買ってきてないんだ」
「にゃー……」
　かまくらは尻尾をだらんと垂れさせて部屋の隅で丸くなった。
　こ、心が痛い！
「あー、かーくん。可哀想」
　可哀想なのは分かる…　でも、でもなこの現況を作ったのは小町なんだからそんな目で見られても困る。
　料理は小町が作ってくれるというのでテレビでもつけて待とうと思ったが逢坂がいるのを思い出し、居心地も悪かったので自分の部屋に戻った。
　自分の部屋と言われても襖を開けられれば丸見えなのだがそれでもこの壁の差は大きいと思う。
　部屋に入って襖を閉めて椅子に座り音楽プレイヤーから音楽を選びイヤホンを耳につける。
　不意に視線を感じで後ろを向くと逢坂がかまくらを抱き抱えながら俺の部屋にいた。
　俺は仕方なくイヤホンを片方外して逢坂に聞く。

「なにしてんの？」
「別に・・・・ 暇だっただけよ。それに話したいこともあったし」
小町以外に抱き抱えられるのが嫌なはずのかまくらは嫌がる素振りを見せず欠伸をしている。
べ、別に家の主人より懐いてるからって悔しいとか思ってないし・・・・ 高級キャットフード買ってくれれば俺にだってあれくらい出来るし！
「あんた何泣いてんのよ・・・・ 私何かした？」
あれ知らない間に目から汁が流れていたようだ。
「・・・・ 気にするな。少し羨ましいと思っただけだ」
「ん？まあいいけど・・・・ それより北村君との事よ！告白するのに協力してくれるって言ったけどどうやって協力してくれるのよ？」
そうなんだよなぁ。まだ同じ高校なら・・・ いや同じ高校でも無理だな。
何故なら俺が友達作るとか無理だから。
「・・・・・ 黙ってないで早く答えなさいよ」
そう言われてもなぁ・・・・・・。
「逢坂は俺にどんな手伝いをしてほしいんだ？俺が何かを手伝うにしても逢坂なりのビジョンがないと手伝いようが無いんだけど？」
「・・・・・・ 分からない。そんなの分からないわよ・・・・ 北村君の前だとテンパっちゃって言いたいこと言えないし・・・・ あんたが同じ高校なら北村君と接点を持ってもらってそこに私も入るっていうのが一番かなとは思うけど・・・・・」
「友達の友達として話の和の中に入るつもりか。確かに話しやすいし、話せるだろうな。だけどなそんなのは所詮友達の友達だ。それじゃ今までと何も変わらないし変えられない」
「でも話すきっかけにはなるし」
「逆に聞くが俺がその場からいなくなったとして逢坂は、俺がいたときと同じように北村と話が出来るのか？」
「・・・・・」
「友達の友達としてじゃ限界がある。だからこそ逢坂から北村に寄り

添わないと意味がない」
「北村君に……」
「ああ、そうだ。北村がどんな性格で逢坂とどれだけ親しいのか分からない俺じゃ役に立つことは殆ど無いだろう。でも約束しちまったから、やれることはやってやる」
「そっか……　うん、分かった。少し考えてみる」
「おう」
「お兄ちゃんー、逢坂さーん。ご飯できたよー」
　話が終わるとご飯も丁度出来たので立ち上がった。
　かまくらは話の途中で寝てしまったのか逢坂の腕の中で寝息をたてている。
「はぁ……」
「およ、お兄ちゃん。ため息なんてはいてどうしたの？」
「いや……　なんでもねえよ」
　かまくらは起きそうもないということで食事中ずっと逢坂の膝の上で寝ていた。
　今度お小遣いをもらったらマタタビを買ってこようと心に誓うのだった。

7話「望まぬ出会い」前編

三重に引っ越してきて逢坂と出会って以来何故か逢坂は毎回のようにうちにご飯を食べに来ていた。
「小町、おかわりもらえる？」
「はいはい～ちょっーと待っててくださいね！今日は朝から5合炊いたので足りると思いますよ～」
そう、逢坂はその見た目の何処に入るの？って疑問が沸くくらい食べるのだ。
よくも人の家でこれだけ食えるものだと思うが1週間も経った現在ではあまり気にならなくなっている。
それに逢坂からご飯代として小町もお金を貰っているそうなので問題無いのかもしれない。
「にゃ～」
かまくらが気持ち良さそうに逢坂の膝の上で丸くなって寝ている。今や小町よりも懐いてるんじゃない？てくらいには懐いてる。
「かーくん機嫌良いね～。にしても大河さんにこんなに懐くなんて最初は思いませんでしたよ。あまり懐かないので」
特に俺にはな。結局翌日にマタタビ買ってきたのに何故か顔面に猫パンチくらったからな。
「そ、そうかな？あ、小町ありがとね」
「いえいえ～。いやーほんと賑やかで毎日楽しいですよ！お料理のしがいもありますからね！」
「小町ってほんとに料理上手よね。見習いたいわ」
「よせ家が火事になる」
一度小町が逢坂と一緒に料理を作ろうとしたときうちの天井焦がしたからな。もうあいつに料理させてはいけない。
「何よ、ちょっと失敗しちゃっただけじゃない」
「天井焦がすことがちょっとなら大抵のことがちょっとで済むだろうが」
気付いた人もいるだろうが俺は今朝から少し機嫌が悪い。それは

昨日ようやく親父に連絡がついて俺の通う高校を聞いたことが原因だ。
今でも夢であったと思いたい。
「もう！お兄ちゃん。誰にだって失敗はあるんだよ！それに二人とも〝同じ〟高校に通うんだから仲良くしないと！」
そう、それが問題なのだ。俺は大橋高校なる高校に通わなくてはいけないらしい。
「天井を焦がしちゃったのは悪かったわよ……　でも！八幡だって料理できないじゃない！毎日小町が作ってるもの！」
何？俺が料理出来ないだと？専業主夫希望のこの俺が？
「あのー大河さん」
「どうしたの？小町」
「お兄ちゃん、凄い料理出来ますよ？多分小町よりも上手いくらいです。小学生の頃から帰ってきて料理ばかりしてましたから」
「おい小町。俺の過去をひけらかすんじゃねえよ。軽いトラウマなんだぞあの頃は」
そうあの頃虐めに耐性が無かった俺は料理にストレスをぶつけたのだ。おかげで物凄い料理スキルを獲得したわけだ。
「へえ。ならどうして小町がつくってるの？」
「……　逢坂料理に大事な物ってなんだと思う？」
「知らないわよ……」
「んー小町は愛情かな？」
「正解はやる気だ」
「「は？」」
「つまりやる気が無いから作らないだけだ。めんどくさい」
「まっ、お兄ちゃんらしいね」
「数少ない取り柄をいかさないだなんて……」
「おい数少ない取り柄ってなんだよ、俺にだって取り柄の一つや二つくらいあるだろ……　あるよな……」
目が腐っている。友達がいない。料理出来るけどしない。あれ？俺に取り柄無くね？

「それじゃあ今日の夜ご飯はお兄ちゃんに任せるね！」
「いやちょっと待てって」
「冷蔵庫の中そろそろ無くなるしついでに買ってきてね♪」
「それが目的か……」
　昼御飯を食べ終えた俺は買い出しに行くために服を着替えて財布と携帯を持ち家を出た。

……。
「なんで着いてくんの？」
　すぐ後ろには何故か逢坂がいるのだ。
「別に良いでしょ。夜ご飯が気になっただけよ」
「別に辛いものにはしねーし。茄子もピーマンもニンジンもいれねーから安心して家で待ってろって」
「別に良いでしょ、着いていったって」
「はぁ…　好きにしてくれ」

　近くのスーパーに着き鮭と玉葱にジャガイモ、卵、豚肉、牛乳、パン粉、油、醤油、カレーの元を買ってスーパーを出た。
「お、重い……」
「重い方持とっか？」
「いやいい…」
　逢坂は何も言わずにスーパーの袋を持ってくれたので負担がかなり少なくてすんだ。てか一人じゃやばかったかもしれない。
「逢坂」
「何よ」
「来てくれて助かったわ。荷物ありがとな」
「これくらい別に何でもないわよ」
　逢坂は悪い奴ではない。直ぐに暴力を振るうし口も悪いが真っ直ぐで自分を偽らないし思いやりもある。
　俺の前での逢坂しか知らないから断定は出来ないが一週間という時間を少なくともご飯を一緒に食べてきて性格を偽るような奴には

見えない。
ただ不器用なだけかもしれないが。
「おーい、もしかして逢坂じゃないか？」
後ろから突然大声で呼ばれて俺は振り向き逢坂はその場で固まった。
俺の目の前には青緑色の髪をした男性が立っていた。眼鏡をかけてＴＨＥ優等生という肩書きが似合いそうだ。
「逢坂だよな？」
「ひ、ひたみゅら君！」
……　見たこと無いくらい逢坂は緊張しておりキョドっている事から察するにこれが例の北村君か……。
「あはは、その面白い反応は間違いなく逢坂だな。そっちは逢坂の彼氏か？」
「ち、ちがっ！」
「んなわけねーだろ。俺はただの…　親戚だよ」
「ふーん、そうなのか。逢坂に親戚なんていたのか」
「ひ、ひたむら君！こいつとは友達なの」
俺の華麗なる作戦が台無しだよ……。
「親戚じゃないのか？」
「あ、ああ。そうだな家が近所なだけだ。な？」
「そ、そうなの！」
「そっか、そっか。休み中に新しい友達が出来るなんて流石逢坂だな！そうだ、これからスドウバックスに行くんだが逢坂達も一緒に行かないか？」
「いや俺は帰るわ。荷物もあるしな」
「そうか？それは残念だな。んー…　その荷物俺にも運ぶのを手伝わせてくれないか？それなら問題ないだろ？」
いや問題あるだろ…　てか逢坂二人きりになるチャンスだぞ。お前が一言帰れって言えば問題なくなるんだ。
「……」

駄目だ・・・　完全に緊張して真っ赤になってやがる・・・。
「恋・・・・　か」
「ん？どうしたんだ？」
「いや何でもない」
「そうか。俺は北村祐作って言うんだ、よろしくな」
「・・・　比企谷八幡だ」

８話「望まぬ出会い」後編

「比企谷八幡だ・・・・」
「それじゃ俺はこっちを持つから行こうか」
そう言って重い方の荷物を持つ辺りモテるタイプなんだろうな。
てか逃げ場をなくされた気もする。
北村に着いていくとオサレなカフェに着いた。
え？俺がこんなオサレなカフェに入っても良いのかよ、訴えられたりしないよな？てかパクリじゃないのかこれは・・・・。
中に入ると席は埋まっており空いている席は無かった。
よし！これで帰れる！と思ったら北村はそのまま入っていき奥で座っている女性に声をかけた。
「亜美、すまんな。少し遅くなった」
「おそーい。１０分も遅刻・・・・て後ろの人達は？」
「ああ。俺の友達の逢坂と比企谷だ」
いつから俺は友達になったんでしょうかね・・・・分からん、八幡記憶にない。
「ふーん。私は川島亜美よろしくね♪」
なんだろう・・・・どことなくこの笑顔は偽物っぽい。まるで俺が大人に対してする営業スマイルみたいな笑顔だ。
「私は逢坂大河、よろしく」
逢坂は若干睨みを効かせながら川島の事を見ている。どうやらおきに召さないようだ。
まっそれは俺も同じだか。
「比企谷八幡です・・・・」
「よろしくね♪」
（あみちゃんがこーんなにも笑顔振り撒いてやってるって言うのに目くらい合わせて挨拶しろよ。てかさっきから睨んでるこいつは何なんだよ、あみちゃん、超ー気分悪いんですけどー）
「亜美は昔うちの近所に住んでて所謂幼馴染みってやつだ」

「はぁ……」
（ため息？あみちゃんを前にして？あり得ないんですけど……）
「悪い俺ちょっとトイレ行ってくる」
「気分悪いのー？大丈夫？」
「……　気にしないでくれ」
（……　気にしないでくれって……　あーもう限界なんなのこいつ……　目は腐ってるし中身まで腐ってるんじゃないの？てかいい加減こっち見て会話しろっての）
「俺もトイレ行ってくるよ」
「は？じゃあ俺待ってるから行ってこいよ」
「そんな拒絶しないで一緒にどうだ？俺は比企谷とも親睦を深めたいぞ！」
　は？男同士で親睦深める前に逢坂と親睦深めてやれよ。見ろ、逢坂の奴目が点になってるじゃねーか。
　てかトイレでどんな親睦深めんだよ、嫌だよそんな濃厚な親睦なんて。
「いや俺は一人でトイレ行く派だから。むしろ好きだから」
「まあまあ良いじゃないか！はははは!!」
「お、おい……　力強……」
　ほぼ強引にトイレに連れ込まれる俺。もう、ほんとに帰りたい……。
「比企谷は亜美のことどう思った？」
　トイレに入って第一声がこれである。
　本当に意味がわからない。
「は？」
「亜美を見て率直な感想が聞きたいんだ。話してくれないか？」
　先程までのおちゃらけた北村は何処にいったのか真面目な顔で聞いてくる。
「普通に可愛いと思ったけど？スタイルも良いし性格もいい」
「そうか……　可愛いことは認める」
「でも」

「ん？」
「あれはなんだろうな・・・　偽物っぽいと言うのか。よく分からんが本心では言ってない、気がする」
　本当、ボッチとの距離感は掴んでほしいものだ。あれだけ相手の顔を伺って話しているのを見れば本心で話してないのは分かる。まっどっちでもいいが。
「そうか。ちょっとこっちに来てくれるか？」
「ん？何でだよ、俺はトイレに用があるんだよ」
「まあ見てくれって」
　トイレからこっそりと俺達が座っていた座席を見ると川島は先程までとはうってかわりまるで別人のようだった。
「あーだっるーい。ねえ、あんた。あみちゃんのアイスティー無くなっちゃったから店員呼んで頼んでくれない？」
「・・・・」
「ちっ。無視かよ・・・　てかさっきから態度悪くな～い？さっきいた男もそうだけど～あれってあんたの彼氏？あの目の腐り具合やばくなーい？」
「別に彼氏じゃないから」
「あっそ別にどうでもいいけどぉ～」

「これが亜美の本心だ。横暴でわがまま。生粋のお姫様タイプだ」
「それで？」
「別段驚かないんだな」
「そりゃ誰だって自分が一番に可愛いだろ？他人の為になんて言ってる奴に限っては特にな」
「成る程な。逢坂と一緒にいた理由がなんとなく分かったよ」
「は？」
「あいつは中々分かってもらえないとは思うが良い奴なんだ。比企谷もそこを理解したから一緒にいるんだろ？」
「どうだろうな・・・」
「俺は亜美のあの性格が嫌いじゃない」

「それで？あの外面を外させたいのか？」
「ああ」
「でもそれが良いこととは限らないだろ？」
「どうしてだ？外面を取り付くっても良いことは無いと俺は思うんだが」
「それはお前のエゴだ。あれはあいつ自身が生きてきた中で必要だと思ってしてる事だ。それを知ったような口で周りが口を挟むことじゃない」
俺は知っている。
俺がそうだったように――――――――――――――――――――。
俺は知っている。
俺が大人に対しては良い子でいようと外面を取り付くっていたこと。
そしてそれがどれ程辛いことなのかを。
自分を欺くことは自分じゃなくなるといっても良いだろう。でも生きていくにはいずれ誰しも自分を欺くときはきっと来る。それが早いか遅いかだ。
そして俺は知った。
選んだ――――――――――――――――――――。
自分でいるためにボッチになると。

パシンっ。
店内に響く頬を打つ音。
先程から川島に色々言われ続けた逢坂が限界に来たようで川島の頬をひっぱたいた。
よく今まで我慢したと俺は思うが北村はどう思っているのだろうか。
北村は席に戻っていく、俺も後を追うように席に戻る。
「祐作～。ぶたれたぁ～」
川島は北村にすり寄るようにして少し赤く染まった頬を見せる。
「分かった、分かった。悪いな逢坂、それに比企谷。今日はこれで帰ら

せてもらうよ」
荷物は?と思ったがここでそれを聞く勇気は俺にはない。
そして静かになった店内では放心している逢坂。
「はぁ・・・・」
俺はマッカンをどうにか入手できないか。あの懐かしい味を思い出しながら逢坂と共にスドウバックスをあとにした。

9話「比企谷八幡に出来ること」

北村と川島と別れたあと逢坂は自分のマンションに戻っていった。
小町に言われた通りご飯は俺が作りいつものちゃぶ台の上に三人分のご飯を準備している。
だが何時まで経っても逢坂がうちに顔を出すことはなかった。
「大河さん‥‥ どうしちゃったのかな‥‥。お兄ちゃん何かしたの？」
「知らねーよ‥‥ くそ‥‥ 美味しくねえ」
カレーを甘口で作ったが味気が無く、部屋がいつもより広く感じ落ち着かなかった。
「‥‥‥‥」
「‥‥‥‥」
小町も同じことを考えているのかそれ以上は何も言わずにご飯を食べ終えた。
「はぁ‥‥‥」
一人自分の部屋に戻りベットに項垂れながら今日の出来事を思い出す。
逢坂は北村に嫌われたと思って落ち込んでいるのだろう。なら解決するのは簡単だろう、だがそれは俺では力不足だ。
それが出来るのは友達か北村だけ。
それならどうする‥‥‥ 俺が出来ること、俺がやらなくてはいけないこと。
逢坂は俺に告白を手伝ってくれと頼んだ。それなら今回のすれ違いもその依頼の範疇に入るだろう。
俺は親父に電話をかけた。
「もしもし親父か？」
「ん？どうした、まだ言い忘れていたことでもあったのか？」
「少し調べてもらいたい事があるんだが‥‥‥」
「‥‥‥ 良いだろう」

「頼んでおいてなんだが理由は聞かないのか？」
「お前が親に何かを頼むなんて初めてだからな、何か大切な事なんだろう。ほら言ってみろ」
「今年、大橋高校に入学する生徒で北村祐作って奴の住所を調べてほしいんだ。完全に犯罪になるから無理なら無理って言ってくれ」
「……良いだろう。一時間ほど時間を貰えるか？」
「すまないな、親父」
「いいさ。その代わり小町を頼んだぞ」
「ああ」
通話を切り俺はベットに座る。
「親父には迷惑をかけちまったな……」
「お兄ちゃん……入っても良い？」
襖を挟んで小町が言ってくる。
「ああ」
「お兄ちゃん……大河さん……どうかしたの？」
やはりというか小町は逢坂の事が気になって聞きに来たようだ。
「ふぅ……大丈夫だ。安心しろって明日の夜には解決すると思うからな」
「そう……なんだ。ねえ？お兄ちゃん」
「ん？」
「お兄ちゃん何かする気なの？」
「……何もしねーよ。むしろ俺が他人の為に何かするなんて俺がリア充になるくらいあり得ないまである」
「……そっか。うん分かった、もう小町はなにも聞かないよ。でもねこっちに引っ越してきた理由……ううん何でもない。それじゃあまた明日ね」
「ああ」
小町は納得はしてないのだろうが俺の部屋から出ていった。
そのあと丁度親父から電話がかかってきた。
「もしもし親父か？」
「ああ。予想より早く分かったぞ。――――――――――――――――だ」

「親父‥‥‥ ありがとな」
「ああ、気にするな。それじゃまたな」
こうして電話は切れて俺は深呼吸をした。
一つの決意を胸に込めて今日は布団に身を任せて目を閉じた。

目を覚ますと外は生憎の曇り。
いや良い天気なのかもしれない。
俺はＩ　Ｌｏｖｅ　千葉のＴシャツを着て朝御飯も食べずに家を出た。
北村との家は電車を乗り継げば２０分程でつく距離だった。
大橋駅で電車に乗り次の駅で降りて徒歩１５分。
北村の家の前まで来た俺は少し気後れしていた。
だって友達の家とか行ったことないし、北村とも友達ってわけではないが。何でも初めては緊張するものだ。
呼鈴をならすことを躊躇していると中から北村が中学の時のジャージだろうか。ジャージ姿で出てきた。
「ん？あれ比企谷じゃないか？うちの前でどうしたんだ？」
「あ、いやちょっと用事があってな。今忙しいか？」
「そうだな、走りに行こうとしていたが別の日にすることにしよう。急用みたいだしな。近くに川原があるんだそこで話そうか」
「ああ」
俺と北村は歩いて１５分くらいの所にある川原に座る。
「それじゃあ、話してもらえるか？」
「その前に一つこの間の事を訂正したい」
「この間の事？何を訂正したいんだ？」
「俺が逢坂の事を理解しているから一緒にいるって言ったよな？」
「ああ。確かに言ったな。その気持ちは今でも変わってないぞ」
「残念ながらそれは違う。俺はあいつの事なんて少しも分かっていない」
ああ、そうさ。俺は何も分かっちゃいないんだ。たった一週間で分

かった気になっていただけだ。
「何故なら俺は逢坂の事が嫌いだからだ」
「……　それはどういう意味で言ってるんだ？」
「どういう意味ってそのままだろ？俺はあいつが嫌いだ。すぐ暴力はするわ、人のこと犬扱いするわ、最悪だ」
「……」
「だってそうだろ？人間は自分が一番可愛いんだ。危害を与えてくる者は皆敵。それが俺の理論だ」
「なら比企谷はどうして逢坂と一緒にいたんだ？」
逢坂と一緒にいたのは小町に言われたからだ…　そう、それで良いんだ。
あの時の気持ちはきっと逢坂を哀れんだからだ…　だからあの時感じたあの気持ちはきっと嘘だ。
それだけだ――――。
「別に。ただ可哀想だと思ったから優しくしてやっただけだよ。そしたらなついてきやがってよ、本当に単純だよな。はっ笑えてくるよ」
「そうか。それでそんな嘘を態々言うために俺の家まで来たのか？」
「は？おいちょっと待てよ。俺は嘘なんて一言も言ってないし本当に思ったことしか言ってない」
「なあ比企谷。お前がどれ程逢坂を思っているのか俺には分かった、何て言えない。けど逢坂の為にそこまで出来るお前は素直に凄いと思うよ」
「……」
こいつさっきから何を言ってるんだ？俺が嘘を？いや違う、俺は嘘なんて。
「今こうしているのが逢坂の為だというのは伝わってきたからな。本意はまだ良く分からんが、比企谷とは良い友達になれる気がするよ」
「俺は……　お前が思っているような奴じゃねーよ」
北村は立ち上がりながら言ってくる。
「そうか？俺は逢坂と同じくらいお前が気に入ったよ。だからこそ今の逢坂の事は比企谷に任せる」

任せる?こいつは逢坂の気持ちに気付いてるのか?
「北村‥‥ お前は」
「あ、勘違いしたのなら謝るが今の逢坂の状況は俺には分からない。ただ比企谷の反応を見て何かあると思っただけだ」
「‥‥‥ そうか」
「それじゃまたな。比企谷、今度は学校で会おう!はーっはっはっは!」
手をふりながら走って行く北村の背中を俺はただ見つめることしか出来なかった。

１０話「雨と亜美」

北村が見えなくなっても川原で座っていると突然雨に襲われて慌てて立ち上がる。
確かここの川原に来る少し前のとこにジョナサンがあった事を思いだしジョナサンまで走っていき店の中に入った。
ういいんという機械音で扉が自動で開き俺は肩が少し濡れてしまったので払いながら入る。

「いらっしゃいませ～」という営業スマイルの店員に笑顔で案内され空いている席に座る。
「はぁ・・・・ 暫くやみそうもないなぁ・・・・」
ほんぶりになってきた雨を見ながら窓を見ていると見知った顔が傘を忘れたのか結構濡れながらジョナサンに入ってきた。
「いらっしゃ、お客様大丈夫ですか？」
「はぁはぁ・・・・・ あ、はい。大丈夫です♪急に雨に降られちゃって傘もささずに出歩くなんてほんとドジで♪」
「・・・・・・」
笑顔を取り繕ってはいるが以前見かけた時とは明らかに様子が違っていた。顔は青ざめており仕切りに外を気にして震えている。まるで何かから逃げてきたみたいだ。
「お客様しばらくお待ちください。タオルを持ってきますので」
「ありがとうございます♪」
店員は慌てて関係者以外立ち入り禁止と書かれた扉を開けて入っていった。
恐らくスタッフルーム的な場所だろう。
「あっ！」
「・・・・・・・」
目が合っても顔を覚えられていないとたかをくくっていた俺を殴ってやりたい。

「昨日も会ったね！なんか～こんなにも早く会えるなんて亜美ちゃん運命感じちゃうな♪」
……　運命安売りしすぎだろ…　運命舐めるなよ、俺だったら会わない運命選ぶまである。
「えーと…　誰かと間違っていませんか？」
結果、俺は他人のフリ作戦をすることした。てか他人だろう普通に。しかも雨に濡れてるから色々と透けててヤバイんだよ、来るなってマジで。
「え？昨日会った比企谷君じゃないの？」
何で名前覚えてんだよ！あれか？リア充は皆人の名前覚えんの得意なの？
「……　俺は…　そう斎藤だよ」
いや誰だよ斎藤って……　でも咄嗟に出たのが斎藤だったんだよ仕方ないだろ。
「ふーん。そうなんだぁ～ねえ斎藤くん」
え？どうしてナチュラルに俺の前の席に座ってるの？いやいやおかしいだろ。
「相席を認めた覚えは無いんですけど……」
（この感じ…　そしてこの腐った目。どう考えても昨日会った比企谷君でしょ。てか亜美ちゃんと相席出来るのに迷惑そうな顔してんじゃねーっての。普通喜ぶとこだろ？）
「そんな嫌な顔しないでよぉー。もしかして斎藤くん……　亜美ちゃんの事嫌い？」
（上目遣いからの手を握る！ここまで亜美ちゃんがしてあげてるんだからこの男もそろそろ）
「……　嫌いというか苦手です」
「え？……」
「というか分かりました。正直に話します、俺は比企谷で合ってます」
（んなことはわかってんだよ！というか今ので落ちないとか亜美ちゃん混乱中…）
「ど、どうして亜美ちゃんの事苦手なの？」

そんなのボッチに犯してはいけない不可侵条約を端から破ってるからだ。
「逆に聞きますけど川島さんは、相手が自分の顔を伺って話してる相手と話したいと思いますか？」
「……　ど、どういう意味かな？亜美ちゃん分かんないな……」
川島の顔は徐々に崩れ始めている。元々顔色が悪かったのもあるが昨日とは別人のようだ。
「あ、あのお客様…　タオルを、良ければ使ってください」
「……　ありがとうございます♪」
いつもの営業スマイルに一瞬で戻り店員からタオルを受け取り髪や服をふき始める。
「それでどういう意味なのか、話してほしいな？」
営業スマイルはどこに行った？と聞きたくなるくらい今の川島は余裕が無いのか少し怒っているようにも見えた。
「別に言った通りの意味だが？顔色を伺ってて疲れないのか？」
「……　はぁー最悪。別に良いかな、もう会うことも無いだろうし。そうだよ？こっちが亜美ちゃんの本性だよ、あんたの言う通りだよ。それでどう思ったの？」
「どうって言われてもな。なんかスッキリしたようにも見えるし怒ってるようにも見えるし…　意外と子供っぽい？」
なんか怒りかたとか昔の小町に似てる気がするし。
「なっ！ななな何言って、亜美ちゃんが子供っぽいわけないじゃん！」
いや怒るなよ…　こえーよあと、怖い。美人が怒るとまじで怖いんだから。
「悪かったよ…　それでもう用は済んだんだろ？てか俺と一緒にいるところなんて知り合いに見られたら大変だろ？早く席移動しろよ」
「嫌。なんか負けた感じがするし。亜美ちゃんもここで注文するの」
いやいやするのって……。
「はぁ……　それじゃあ俺が移動する」
「亜美ちゃんと一緒に食べれるのに溜め息とか止めてくんない？それに一緒に食べてくれないと……　店員さんに比企谷くんが無理矢理

亜美ちゃんを連れ出そうとしてるんですって言っちゃおっかな♪」
　あーもうほんとに良い性格してるよこいつ…。言っちゃおっかな♪じゃねーよ。そんなに軽い言葉にしちゃ駄目だろそれ、普通に俺が死ぬレベル。世間的にって意味で。
「すいません……」
「よろしい♪じゃここは奢ってね！比企谷くん♪」
「いや、俺懐があんまり」
「あ、店員さーん。注文お願いします♪」
「聞いてないのかよ……」
（あれ… さっきまで嫌なことがあってここまで逃げて来てあんなにも嫌な気持ちだったのに… どうしてこんなにも楽しいんだろう……）
「川島……」
「なぁーに？比企谷くん？」
（いつもより声も甘くなっちゃって……）
「いやまじでお金ないから…… お金貸してくれません？」
　ピキッ。
「比企谷くん？」
　あれ？今何か切れた音がしたような……。
「はい」
「正座♪」
「ここでは勘弁してください……」
「んーどうしようかなぁ～♪」
（あーどうしよう……。楽しいな）
「あっ！そうだ」
「嫌な予感しかしないんですが…」
「携帯貸して？」
「なんで？」
「か・し・て♪」
「はい……」
「亜美ちゃんの連絡先登録するからお金ある時に連絡して何か奢って

ね♪」
何故……　何故こうなった……。
（また……　これで会えるかな）
「逆らっても無駄か……」
「それじゃ何か頼もっか♪すいません～」
俺はナポリタンと烏龍茶を川島もナポリタンを頼んで雨が止むまで3時間、解放されることはなく話をすることになった。

11話「ＭＡＸコーヒーと入学式」

川島から半分逃げるようにして大橋駅まで戻って来たときは既に3時になっていた。
「はぁ……」
『逢坂の事は比企谷に任せる』この言葉が頭から離れてくれない。
俺に何をしろって言うんだ。俺に何が出来るって言うんだ。北村が逢坂のマンションに行ってやれば全て解決する筈だったんだ。
「マッカン……飲みてえな……」
俺はふと思い付き携帯のＹａｈｏｏで「マッカン　作り方」で検索した。

「あった……あったぞぉぉぉぉぉ!!あっ……」
駅周辺で叫んでしまった為大変恥ずかしい……がマッカンを作る方法が分かり急いでデパートに向かう。ん?お金はあるのかって?ふふふ……男は常にへそくりというものを持っているのさ…財布の小銭入れの中に小さく折り畳んでいれておいた五千円札を握りしめて俺は材料をふんだんに買い込んだ。
うちには小町がお菓子作りに使っているシャイカーがあるから入れ物は良いとしてインスタントコーヒー瓶のタイプを5個と砂糖6個牛乳3本（八幡が持つには3本が限界だった）を購入した。
うちに帰るなり台所に駆け込みシャイカーを取りだしインスタントコーヒーを子さじ一杯入れて砂糖を4杯入れて牛乳を３００ｃｃ入れて水を５０ｃｃ入れてシェイクした!
そして飲んでみると……。
「これではマッカンではない……」
俺はあるものをスーパーに買いにいき急いで戻って来た。
「よし」
先程作ったマッカン（仮）に買ってきた練乳を流し込んだ。
「ごく……おっしゃあああああ!!」
探し求めていたあの味に一気に近付き暫く作っては飲みを繰り返

した。
「はぁ・・・　やっぱり落ち着くなぁ。この甘さ」
俺は水筒にマッカン（オリジナル）を流し入れ逢坂のマンションに向かった。
呼鈴を鳴らすが中から声どころか物音さえも聞こえてこない。
ドアノブに手をかけてゆっくりと下にさげるとガチャっという音がして扉は開いた。
「どんだけ不用心なんだよ・・・」
悪態を吐きながら玄関を抜けてリビングに来るとそこはまるで地獄画図となっていた。
異臭は未だに漂っているが一番変わったのは台風でも来たのか？って聞きたくなるくらいリビングが荒れていたことだ。皿は床に落ちて割れ、床にはお菓子やら、衣類などが散乱している。
「・・・・」
右手で掴んでいる水筒を握りしめて寝室につながる扉を開けた。
「・・・・・・」
寝室もそうとう荒れていて流石に生ゴミの類いはないが衣類で床が埋まっていた。
ベットの中央では布団が丸まっていた。
丸まっているサイズ的に逢坂がくるまっているのだろう。
「逢坂」
「・・・・・・　なによ」
布団と話すと言うのはかなりシュールな光景だ。と思いながら続ける。
「もう夕方になるぞ。お前の分のカレーだってあるんだからちゃんと食べに来いよ」
「いらない・・・・　何も食べたくない」
逢坂の口調は徐々に嗚咽を伴い泣いているのが分かる。
「俺さ今日北村に会ってきたんだ」
「・・・・・・」
俺は嘘をつくのが嫌いだ。

嘘をつくのは相手の意思を尊重するときに使うことが多いし後になって自分に返ってきて良いことがないからだ。
でも……。
「北村に聞いたんだよ。あの後川島はどうだったって。そしたらあー亜美なら問題ないよ。それより逢坂にはすまないことをしたなって」
たまには優しい嘘があっても良いんじゃないかって思う。

「北村君が……」
「ああ。北村は川島の性格を理解してる。あーいう性格なのをな。だから問題ないんだよ、心配すんなって」
布団がめくられ目を赤く腫らした逢坂が出てきた。本気で逢坂は北村の事が好きなんだなと思う。
「お腹空いた」
「……　ほいよ」
俺は持ってきた水筒を逢坂に渡した。
訝しげに水筒を見る逢坂に俺は一言。
「落ち着くから飲んでみろ」
「……　分かった……　うえっ甘っ……　なにこれ…　うえっやっぱり甘い……」
文句を垂れ流しにしながらも少しずつマッカンを飲んでいる逢坂を見てホッとした俺がいた。
逢坂は無事に?元気になり俺の家で現在カレーを食べている。いや暴食している。先程から何回おかわりするの?ってくらい食べるこいつにおかわりを盛ろうとしてご飯が底をついていることに気付いた。
４合も炊いたのに冗談だろ……。
終始川島の悪口を言っている逢坂をよそに俺は今日の出来事を思い出していた。
逢坂の事で考えてる余裕が無かったが川島は最初何かに追われているような素振りを見せていた。俺の気のせいなのかもしれないが真っ青になった川島のあの顔は何処と無く異常ということは俺にも

分かる気がした。

今日は入学式だ。春うららとは良く言ったもので桜が咲き誇りまるでピンクの絨毯になっている。

大橋高校に到着した俺は、まず時間を潰すことにした。別に友達を作る気もなく逢坂も流石に今日は一緒ではない。ならばと、俺は一人体育館裏へと足を運ぶ。

「あれー？君は新入生君かな？」

体育館裏まで来ると何故か話しかけられた。それも女子に。何故？

「そうですけど・・・」

「あ、ごめんね。あたしは櫛枝実乃梨。あたしも今日からここの高校に入学したんだ」

新入生か聞いてきたのに自分も新入生って・・・。

「えーと俺ちょっと急いでて・・・ それじゃ」

「あ、ちょっと待って。あたし友達１００人目指してて さ！良かったら友達になってよ！」

「は？」

いきなりの言葉に疑問で返してしまった俺は何も悪くないだろう。つーか高校生にもなって友達１００人て・・・。

「いやいや、は？は酷くないかい？いいじゃねーか！友達になろうよ！ね？」

携帯を出しながら詰め寄ってくる櫛枝、恐らくアドレスの交換をしようとしているのだろう。これ以上下手に拒むよりは受け入れた方が楽だろうと携帯を渡す。

「け、携帯を人に渡せるって凄いね」

「そうか？そもそも見られても困るもんとかないし」

「そうなんだ・・・ と、これでよしと。それじゃこれからヨロシク頼みますぜ！比企谷君！」

「おう・・・ て何で俺の名前を？」

「ん？だって携帯のメルアドｈｉｋｉｇａｙ@だったし」
　そう言えば・・・ 次からはｌ　ｌｏｖｅ　ｍａｘ　ｃｏｆｆｅｅにでもしとくか。
「成る程・・・ それじゃ」
「また会おう！」
　所々話し方が変わった子だなとは思ったが特に気にせず携帯を開くと後３０分もまだ時間があった。体育館裏で時間潰そうと思ったら潰せなかったので当たり前なのだが、校門の前にいたのがいけなかったのだろう。俺はこの時の俺自身を後々恨むことになる。
「あれー？比企谷君じゃーん！久し振りだね♪」
「・・・・ 誰でしたっけ？」
　この頃の俺のストレスを権化にしたような存在が目があった瞬間に近付いてきた。てか唯一川嶋とはしょっちゅう会っていたのだ。無理矢理呼び出されてだが。
「あれ～もう忘れちゃったの？ひどーい、亜美ちゃん、比企谷君と会えると思って今日の入学式楽しみにしてたのに」
　心にもない川嶋の言葉により周りの生徒の目を集めてしまう。川嶋は現役のモデルらしい、電話で話しているときに自慢されたのだが結構売れているようで、そのような売れっ子の女の子と仲良く話していれば周りも集まって来るわけで。
「あ、あの！川嶋亜美さんですよね？ぼ、ボク貴女の大ファンで同じ高校に入学できるなんて夢みたいです!!これから三年間よろしくお願いします!!」
「んー？あーごめんね。今亜美ちゃん、大切な話をしてるから後にしてくれないかな♪」
　ゾクッと背筋が凍る感覚に陥る。少しの付き合いだが分かる。川嶋は確実に怒っている。何故怒っているのかは、分からないがかなり怒っている。
（あーもう。ほんと最悪・・・ 今超楽しいのに邪魔しないでくれないかな？てか誰だよ、あんたに興味すらないんだけど、亜美ちゃんと一緒の高校に入れただけ有り難いと思って黙っててくれないかな？）

「こんな目の腐ったような男と話していたら川嶋さんの品格が落ちてしまいます！どうぞ一緒に来てください！」
「は？」
「おい、川嶋」
　一緒に川嶋と出掛けている時に何度か川嶋は、ナンパされていた。決まって言われるこの言葉だが・・・ 最初はそこまででもなかったが徐々に川嶋がキレたのだ。それはもう俺に言ってる訳じゃないのに俺がビビる程度には。
　ただ此処は校門だ。更には入学式でこれからの高校生活がかかっていると言っても良いくらい大事な行事だ。そんな大切な日に問題を起こしたら川嶋は孤立してしまうかもしれない。それだけは駄目だ。
「川嶋。落ち着け」
「でも！」
「えーと何君だっけ？」
「ああ？誰もお前になんて話しかけてねーんだよ！」
　今時いるんだな、こーゆう奴って。こーゆう奴に限って有ること無いこと噂にするから困るんだよな。だから標的を川嶋から俺に移す必要がある。
「はぁ・・・ 高校生にもなって餓鬼かよ。よくここの高校受かったな。いや人数足りなくて仕方なく取ったのかもな」
「んだと！てめー喧嘩売ってんのか!?」
　拳を握る？君に挑発を続ける俺。よし後はその拳で俺を殴ってくれれば問題なく終わるな。
「馬鹿・・・。はぁ・・・ ねえ、あんた。何様なの？言っておくけどあんたなんかより比企谷君の方がずっと一緒にいて楽しいから、てかあんたに興味すら無いし。とっとと失せてくれない？」
　俺と？君が固まる。川嶋が急に発した言葉が理解出来ない俺と？君。
「は？え、えと？」
「意味わかってないの～？えーと邪魔だから消えて？って言ってる

の」
「くそがっ！何がモデルだよ！性格なんて最悪じゃねーか!!」
叫びながら走る去る？君。でもどうしてこんなことを・・・　あれじゃあ。
「おい、川嶋」
「どうしてこんなことを？でしょ」
「あ、ああ」
「比企谷君が、やろうとしていた事でしょ？あいつの注意を全部自分で被るなんてやり方を」
「・・・　でもあれじゃ川嶋が有ること無いこと「言われるわね」・・・」
「でもそんなのかんけーないの。だって亜美ちゃんってこんなに可愛いんだよ？性格なんてどうでも良いの♪」
「そっか・・・」
初めて会ったあの時の川嶋が付けていた仮面は少しずつ剥がれているそんな気がした。

12話「始業式」

一悶着あって余計に目立ってしまったが川嶋は気にしていないのかさっきからずっと俺の傍におり話続けている。
「ねえねえ!比企谷君って今日はあのチビと一緒じゃないの?」
「チビ?・・・ あー逢坂の事か」
一度だけ川嶋に呼び出された時に何故か、逢坂も着いてくると言って着いて来たのだがその時は本当に大変だった。到着して直ぐに川嶋には睨まれて、川嶋のちょっとした言葉に逢坂の短気よりも短い糸がプツンと簡単に切れて喧嘩になったり、それを宥めようとした俺に逢坂の蹴りが顔面に直撃したりと・・・ 本当に散々だった。
「そうそう。比企谷君っていっつも逢坂さんと一緒にいるでしょ?」
「そんなことないと思うぞ?逢坂が仲良いのは、俺の妹の小町だしな。俺はそのおまけみたいなもんだろ」
「おまけねぇ・・・」
「どうしたんだよ」
「はぁ・・・ 何でもないわよ。それより比企谷君に妹なんていたの?」
「ああ。世界一可愛い妹がな」
これだけは自信をもって言えるな。俺の妹より可愛い奴なんている筈がない!
「へえ~そうなんだー。それって私よりも?」
「当たり前だろ?」
「へえ~、私も会ってみたいな♪その可愛い妹さんに」
「駄目だ」
「えーどうして?」
「なんか悪影響にしかならなさそうだから」
逢坂だけでもこの頃大変なのに、川嶋まで小町と知り合ってしまったら俺の兄としての威厳が無くなってしまう、そんな気がする。逢坂は、どちらかと言えば手のかかる妹みたいな存在だが川嶋は違う。下手したら姉に見えるし、俺よりもしっかりとしている(取り付くっている時は)なので小町には会わせたくない。絶対めんどくさい事にな

る。
「えーそんなことないと思うけどな～。それに何時かは会わなきゃいけない時がくると思うし・・・」
「会わなきゃ？なんだそｒ」
　会わなきゃいけない時がくる、川嶋の言葉を聞き返そうとしたが俺は後頭部を蹴られることで地面に転ばされる。
「痛っ・・・　なんなんだよ。逢坂」
　蹴ってきたのは確認しなくても分かったが逢坂だった。今日は準備があるとかで一緒に出ずに俺だけ先に来たのだが今頃になって到着したらしい。
「はん。朝からばかちー見て興奮してる雄にお灸を据えてやったのよ。たくっ繁殖期の犬みたいに見境ないんだから」
「いや俺が興奮してるとかありえないだろ。むしろ、今まで興奮するなんてイベントすら無かったから興奮の仕方すら分からないまである」
　いや興奮の仕方が分からないってなんだよ・・・　もうちょっと言い方あっただろ。
「きもっ」
　ちょっとー確かにキモいと本人である俺ですら思ったけど、そんなに顔をひきつらせて言わなくても良いんじゃないですかね？八幡傷付いたよ？泣いちゃうよ？
「あれーそれなら比企谷君。私が興奮させてあげよっか？」
　川嶋が耳元で息を耳に吹き掛けながら言ってきて顔に熱が帯びてきて、赤くなっていることがわかる。
「この変態犬ー!!」
「あはははは、朝から面白いなお前達は！」
「北村・・・」
「ひ、ひたむら君!?」
　始業式まで後１０分程の時間で北村が登校してきた。でも北村ならもう少し速めに来そうなものだが。
「祐作のわりには遅いわね」

「いやー二時間前には着いていたんだが、どうにもグラウンドが気になってしまってな。グラウンドを見てたのだがどうにも走りたくなって今まで走っていたのだ」
　それで少し汗かいてるのか…　始業式前にグラウンドで走る奴なんているんだな…　川嶋は呆れてるし、逢坂は…　逢坂は逢坂だな。
「さて皆始業式に遅れる前にそろそろ入ろうじゃないか」
「その前にクラス分けを見ておかないと座る場所分からなくないか？」
「成る程流石比企谷だな。それじゃクラス分けを見に行こう！」
「お、おー！」
「はぁ…　それじゃ比企谷君、行こっか♪」
「あ、ああ…」

　クラス分け…　それは言ってしまえば戦争だ。仲の良い者と一緒になりたくて思わず目を瞑り手を合わせて少しずつ目を開けていく。そんな人を見たことが無いだろうか？そんな奴がいたら言ってやるといい。合格発表か！と。その分友達のいない俺は誰と同じクラスになったとしても構わないのでこの戦争から早々に抜けることが出来るのだ。
　うむ、ボッチは素晴らしい。
　だが俺がこんなことを考えていると言うことは、少なからず今までとは違った事が起きている証拠である。俺と同じクラスには、逢坂と川嶋と北村、そして朝絡まれた櫛枝という名前が鎮座している。
「わーい♪比企谷君、クラス一緒だね！」
「おお、皆一緒とはな」
「ひ、ひたむら君と一緒…　ボフッ」
　そう俺の中で第二次戦争の狼煙が上がった瞬間だった。

13話「嫉妬と亜美」

始業式。小学校から中学校、中学校から高校に進学する。人によっては大人に近付く日そんな大切な日には決まって様々な感情が浮き足立つ。期待や不安。場合によっては嫉妬。そんな四面楚歌な感情が広い体育館を包み込んでいる。正直言って居心地が悪い。

俺の人生の中であったのは哀れみを帯びた視線と迫害だけ。あとは興味すら抱かれない瞳。そんな感情には慣れている。

だが今は違う。先程校門の前で起きてしまった事件（川嶋と一緒にいただけだが）が何故か知れ渡っており、しかも俺が川嶋と付き合っているという尾ひれまでついてしまっていたのだ。そりゃ嫉妬や妬みの視線を四方から向けられる。

俺と噂になるとか川嶋には申し訳ないことをしたと思っている。出来る限り学校内では関わらないようにした方が良さそうだな。

人の噂も75日と言うしな。こんな噂なんて俺が皆の認識から外れれば無くなるだろう。

始業式も無事に終わるとゾロゾロと1年C組の教室に向かう。この瞬間もあちこちからの視線が痛いが俺なんかと付き合っている疑惑を持たれてしまった川嶋の方が災難だろう。正直川嶋との席名前順の席順と言うことでかなり遠い。そこだけが唯一の救いだろう。

後はメールで川嶋に高校では他人のフリでもしようって送れば良いだろ。送信っと。

「よう！君はあたしの友達二号の比企谷きゅんじゃないか！」

忘れたくても忘れられないほどの印象力ってある意味凄いと思う。てかきゅんてなんだよ、きゅんて。

「おお・・・ きゅんは止めてくれないか？」

「何を言う!!親しみを込めた証じゃないかー！これから三年間苦楽を共にするのだ、かしこまる必要はないさ！」

「おお、櫛枝じゃないか。なんだ比企谷と知り合いだったのか？」

櫛枝のペースに呑まれている中北村が此方に来た。正直一人じゃ

相手が出来ないからナイスだ北村。
「おう！あたしの友達二号だぜ!!あ！因みに友達一号はお母さんだぜっ！」
　ここでお父さんは？と聞くのは野暮だろうな・・・。
「へえ、仲良いんだな。俺も櫛枝とは野球部で同じだし比企谷も一緒にどうだ？」
「お！いいじゃんいいじゃん！一緒にやろうよ！比企谷きゅん！」
　だからきゅんは止めろって！
「俺帰ってからやることあるから・・・ すまん」
　そうそう家に帰ったら用事が、プリキュア見たりプリキュア見たり・・・・。
「そっかー。んー残念だね、でも用事があるんじゃ無理にも誘えないね」
「ああ、そうだな。でも何時でも歓迎だからな！」
「おう！何時でも待ってるぜ!!て、あたしはソフトボール部なんだけどね」
「あ、ああ。まあ考えておくよ」
　まっ入る気はないけどな。二人とも良い奴だし、きっと皆の中心的な存在になるだろう。そんな中に俺なんかの異物が入ってはいけない。
「あ、そうだ。北村」
「ん？どうしたんだ？」
「逢坂誘って見ろよ、あいつ運動神経良さそうだし」
「ふむ・・ 確かにな。よし櫛枝、逢坂を勧誘しに行くぞ！」
「合点だ!!」
　これで少し進展すると良いんだけどな。後は・・・ 俺の後ろで般若と化している川嶋をどうにかしないとな。
　取り敢えず教室で騒ぎを起こすのは不味いか・・ いやここでおもいっきり俺を拒絶してくれれば全て丸く収まるが・・・ この雰囲気はどう考えても違うしな。
「な、なあ川嶋さん」

「なーに比企谷君♪」
「……」
なんだこの無言のプレッシャーは…　川嶋は現在俺のすぐ後ろにいる。そして俺は川嶋の顔を見ていない。だが分かる。これは完全に怒っている。
「はぁ…　ちょっと来て」
「はい…」
川嶋の一言に着いていくという選択肢しか取れなかった俺は視線を上げると逢坂と櫛枝が楽しそうに話していた。北村はいないが仲良くなったのなら良かったのだろう。

俺は黙って川嶋に着いていくこと数分。屋上に来ていた。此方を向かずに黙っている川嶋。
俺も黙っている事しか出来ず、川嶋から言われるのを待つ。
長い…　とてつもなく長く感じる。チャイムの鐘が鳴る。あまり遅くなると先生達が捜しに来るだろう。今から簡単に学校の説明をして解散になる簡単なＨＲの時間なのに担任になった先生には、申し訳なく思う。
「ねえ、比企谷君」
川嶋からかけられた言葉は、教室で聞いた声とは違い弱々しく震えていた。
「私は元々東京に住んでたんだ。今は伯父さんの家に下宿しているの。こっちに来た理由はさ…　ストーカーから逃げて来たんだ」
ストーカー…　本当にいるんだな。
「それってモデルの仕事が影響してるのか？」
「うん。私怖くてさ…　怖くて、怖くて……　逃げ出して来たんだ」
川嶋は、スッと俺の背中に顔を埋める。川嶋の体温が震えが伝わってくる。
「比企谷君…　私を助けて」

１４話「川嶋ｂｒｅａｋ１」

今俺は自分の部屋にこもり、まだ夕方だというのに布団をかぶっている。その原因は間違いなく、今日学校で川嶋に言われたことが原因だ。

『比企谷君…　私を助けて』

あの時の言葉と体に伝わる暖かい感触が今この状況を作り出していた。更に言えばその後の会話も問題だろう。

回想

「比企谷君…　私を助けて」

「お前なら俺なんかを頼らなくても北村とかが助けてくれるだろ？」

「違うよ…　比企谷君。私は貴方に助けてもらいたいの」

川嶋は手を俺の背中から前に回し抱き付いてくる。

「か、川嶋!?」

「ねえ？分からない…　かな？」

川嶋の熱を帯びた声、川嶋の体の熱で俺はおかしくなりそうだった。

「何をだよ…」

～～♪。そんな状態の中で川嶋の携帯が鳴る。俺の体がビクッと震えて何故か固まってしまう。

「あー…」

携帯を弄りながら呟く川嶋。抱き付いたままなので早く離れてほしい…　流石に色々と限界だった。女の子特有の良い匂いにモデルだからなのかスレンダーな体つきは見なくても伝わってくる。なのに二つの膨らみは、かなり大きく女性という事を俺に認識させてくる。

ぱたんっと携帯を閉まった川嶋は、ようやく俺から離れると残念そうに言ってきた。

「祐作が先生に色々と言って誤魔化して時間を稼いでくれたみたいなんだけど限界だから戻ってこいって」

どうやら北村が機転を利かせてくれたらしい。ありがとう北村。いや北村大先生と言っておこう。これで入学式初日からサボって怒られるなんて事にはならなくてすみそうだ。
「なら早く戻るか」
「そうね・・・ ねえ比企谷君」
急に真剣な目になる川嶋に少したじろぐ。
「さっきの事考えておいてね・・・」

回想終わり。

で、現在布団の中で半ば悶えているという訳だ。
「お兄ちゃん、ただいま!て、あれ?お兄ちゃん何してるの?」
「・・・ あー小町。俺ちょっと今日動けそうにないから料理作ってくれないか?」
「え?うんそれは大丈夫だけど。どしたの?熱?具合悪いの?」
ああ、ある意味熱かもしれない。
「お兄ちゃん、ちょっとスピリットクライシスだから」
「・・・ はぁ?お兄ちゃん・・・・ スピリットクライシス?精神が病んだとか、直ぐに言うやつに限って決まって録に病んだことなんてねーんだ。つーかいつも家で日がなゴロゴロしてるだけで人との接触避けてきた奴が、ちょっと辛いことがあったからって直ぐにそれを言い訳にするなよ」
「・・・ 小町ちゃん?何処でそんな言葉を覚えてきたの?とても汚いわよ?」
「うっ、お兄ちゃんの真似だよ!」
似てねぇ・・・ てかむしろ逢坂の真似だろ。俺の妹がどんどん毒されていっている気がする。
「まっ、何があったか知らないけどさ。一人であんまり抱え込まないようにね?」
「小町・・・」
「ここに引っ越してきた理由を少しは考えてね?」

小町は、それだけ言うとご飯を作りに行ってしまう。
俺がここに来た理由・・・。虐めが原因だろう。
俺は、俺が虐められることで誰かが傷ついているなんて思ったことはあの日まで無かった。俺の目の前で小町が涙を見せたあの時までは。
「心配するなよ。そうだなと、友達ももうで来たしな」
「え!?お兄ちゃんに!?誰々!?女の子!?」
おいおいガッツき過ぎだろ。お前は餌を与えられたかまくらか？目輝かせんな。
「もしかしてお兄ちゃんの友達って大河さん？」
「いやあれは違うだろ？」
実際の所どうなんだろうな。友達って関係でもないし、俺があいつの恋を応援してるって感じがしっくりくるか。
友達というのが何なのか、どういった関係を友達というのか俺にはよく分からない。だけど、きっと、そんな曖昧な言葉を用いてでも、友達だと思いたい奴が俺にも出来たということなのだろう。
「じゃあ誰なの？」
「別に誰でも良いだろ」
「ふーん。まっ今のお兄ちゃんの顔は悪くないし、また今度紹介してね小町に」
「いやしないから」
「えーでも。未来のお姉ちゃん候補かもしれないし小町も気になるよー」
ふとそう言った小町から視線を外して居間を見るとモデル雑誌が乱雑に置かれている。その表紙を飾っているのが川嶋で、ふと思った言葉が出てしまう。
「なあ小町。モデルの川嶋って知ってるか？」
「んー？そりゃ今若い子で一番の人気を誇ってるモデルだからね。この頃忙しいらしくてモデル業休んでるけど。どうしてお兄ちゃんの口からそんな人の名前が？」
「いやお前の買う雑誌の表紙によく載ってるから聞いてみただけだ」

「ふーん。まっ人気なのは確かだよ、川嶋亜美が出てないだけで売り上げ落ちてるらしいし」
小町の話を聞いて俺が思っていたよりも川嶋のモデルとしての人気があり、有名なことが分かった。
それ以上川嶋の話題は出ず、小町の美味しいご飯を食べ終えた俺はお風呂に入って早めに寝ることにした。

朝よ来るなといくら思っていても誰しも等しく朝は来るものだ。昨晩布団に入るのは早かったが、このまま寝てしまえば、朝になって学校にいかなければいけない。そう思うと中々寝ることが出来なかった。
現在俺は寝不足という体調不良を抱えたまま、起き上がり学校に行くことになった。
朝食を食べようと襖を開けると昨晩はいなかった人物がいた。
「あ、お兄ちゃんおはよー」
「あんた何時もより、目が濁ってない？」
逢坂大河が小町と朝食を食べていた。
殆ど毎日のように食べに来る逢坂が小町とうちの食卓を囲んでいる。そこまではいい、だが小町がニコニコと俺を見ながら昨日の雑誌を持っている。この姿を見たときに俺は、開けた襖をそのまま閉じた。
「ちょ！お兄ちゃん！どうしてモデルの川嶋さんと友達なのを昨日は隠してたの!?」
逢坂が話したのだろう、小町が詰め寄ってくる。一枚の襖ではなんの意味も持たず簡単に開けられてしまう。
俺の新たな黒歴史になりそうな事で昨日悶えており思い出したくないが小町にこれだけ黒歴史の原因でもある川嶋の話をされると思い出してしまう。俺は勝手に話しただろう主犯を威嚇することにした。
ガルルルルと擬音が付きそうな勢いで朝食を食べている逢坂を睨むとにゃーんという擬音が付きそうな勢いで睨み返された。いや

にゃーんに負けるなよ、と思うが怖くて目をそらしてしまった俺の敗けだろう。
朝食を食べているときも小町の質問攻めは止まるところを知らなかった。

逢坂と小町と学校に向かっていると（主に俺は一人、少し後ろを歩いている）櫛枝が歩いているのが見えた。
「おーい、みっのりーん」
俺には決して発しないだろう甘甘な声で櫛枝の背中に抱き付く逢坂に櫛枝も嬉しそうに返している。
「んー？そこにいるのは比企谷きゅんじゃないかい！」
しまった、と思ったときには遅かった。隣にいる小町は目を輝かせているし逢坂は、さっきまでの笑顔が嘘のように俺を睨んでいる。
こういう場合の選択肢としての行動は決まっている。
「ども」
一礼して逃げの一手である。
「比企谷君♪おはよ」
男なら誰しも勘違いしそうな甘ったるい声で抱き付いてきた人物を俺は無意識的に理解してしまった。
「川嶋……」

１５話「川嶋ｂｒｅａｋ２」

「え？・・・・ えーー!!」

朝の通学路で小町の声が響き渡る。木に止まっていた鳥達が一斉に羽ばたき登校している生徒達からは嫉妬や非難の目で見られる。朝からほんと、どうしてこうなった。ボッチである俺には、こういった視線は馴れていないので正直どうすればいいのか分からない。そんな俺の気持ちを知ってか知らずか川嶋は胸を必要以上に背中に押し付けてくる。

「か、川嶋止め」

止めてくれ。そう言う筈だった。

「うぉぉぉりゃあああああ!!」

「ぐあっ！」

逢坂の叫び声を聞いたと思ったら俺は地面に倒れている。今一脈絡としない。だが静かに意識が落ちていくなかで最後に俺が聞いた声は、逢坂と川島が叫んでいる声だった。

体が痛い。うっすらとした意識が戻るとき俺はベッドの上で横になっていた。消毒液の匂いが漂うこの部屋は保健室だろうか。体を起こすと保健室には誰もいない。保険の先生くらいはいてもいいと思ったがいない方が正直助かった。携帯を開くと小町からメールがきており、帰ったら川島との関係を聞かれるらしい。

溜め息をつきながら起こした体を再びベッドに預ける。携帯を閉じて目を閉じる。川島との関係。

俺と川島がどんな関係なのか、正直俺が一番分かっていなかった。ただ小町に友達の話をしたときに、真っ先に思い浮かべたのは川島の顔だった。偽物の仮面を被り、自分すらも欺き続けた川島。その仮面に少しだが亀裂が入っている。それはこの間の学校内での出来事で分かる。以前の川島なら自分をよく見せる為にあの男子に対してあ

んな言葉は言わなかったはずだ。
俺が川嶋の仮面に亀裂をいれてしまったのか？・・・
いや俺はそんな出来た人間ではない。たまたま川嶋の逆鱗に触れたのか？今は考えていても仕方ない。時間は９時３０分か。まだ１時限目の途中か。
よし二度寝するか。
サボれる時はしっかりサボる。それがうちの家訓だからな。
チャイムの音が聞こえ、目を覚ますと保険の先生が椅子に座っていた。どうでもいいが若いな。大学生って言われても信じちゃうレベル。
つまり、ボッチな俺として、話しかけることが出来ない。相手は保険の先生。されど女性である。これがおばあさん、とかだったら良かったのだがそう言うわけにもいかない。ヤバイ、早くも詰みそうだ。今日は一日保健室登校か。それも悪くないな、と考えていると保健室の扉が開く音がした。
慌てて目を瞑り寝たフリをする。
「失礼します」
二人の女子生徒の声がする。今朝からよく聞きなれた声だ。一人は櫛枝、もう一人は俺が保健室で寝る理由を作った逢坂だ。気のせいか聞こえてくる逢坂の声に元気が無さそうに聞こえるが。
「あのー比企谷君、起きてますか？」
今の声は櫛枝か。生憎、俺は今日一日いけるところまで保健室の暖かい布団のなかでサボるつもりだ。
「比企谷君ならさっき起きたみたいよ？まだ出てこないのは緊張してるのかしらね」
くす。と笑いながらカーテン越しにも此方を見ているのが分かる。え？何で気づいてるの？あなた一度もカーテン捲ってすらないよね？
「そうですか、ありがとうございます」
保健室の先生にお礼を言いながら足跡は近付いてくる。観念して布団から起き上がる。

カーテンを乱雑に開けながら櫛枝は笑顔で言ってくる。
「元気そうで良かったよ、比企谷きゅん」
いやだからきゅんって何だよ。後ろで保険の先生がコーヒーカップ片手に笑い堪えてんじゃねーか。凄い様になってて似合ってるから何も言えないが、あの人ほんとに何歳だよ・・・ そして何者だよ。
「よお・・・」
櫛枝の答えに簡素に答える俺。あれ？何時もなら逢坂の声が一速く聞こえてくるが今は何故か櫛枝の後ろでモジモジしている。は？誰だよこいつ。
「その・・・」
櫛枝の後ろから顔だけを覗かせる逢坂。
「さっきは・・・ 悪かったわよ」
「大河？ちゃんと言うんでしょ？」
「・・・ ごめん、なさい」
それだけ言うと逢坂は、保健室から走って出ていってしまう。俺の思考は止まったまま櫛枝を見ると苦笑いで返された。
「比企谷君。ちょっと着いてきてもらえるかな？」
どこに？とは聞けず頷くことで同意する。逢坂の奇行とも取れる行動が俺も気になっていたのかもしれない。
保健室を出ていく際に保険の先生から視線には気を付けなさい。と耳打ちで言われた。成る程、つまりカーテンの隙間から見た俺の視線で起きているのに気付いた、と。どこのゴルゴだよ。こえーよ。あと怖い。
女性の人の怖さを再確認した所で櫛枝に着いてきて辿り着いたのは、入学式当日に櫛枝と会った人通りの少ない体育館裏。
これがギャルゲーなら右上に体育館裏と何処か魅惑的に感じるシチュエーションであるが現実で起こるとそんな感じは一切しない。まず、高感度事態上がっていないのだから当然だ。そういうムフフ展開ではなく、女子高生に体育館裏まで連れて来られる。つまり、カツアゲである。小町ー、お兄ちゃんもう駄目かもしれない。
櫛枝の表情は、先程とはうって代わり真剣なものになっている。

「まず最初に授業サボらせちゃった事を謝っておくね。ごめんなさい」
そう言って頭を下げてくる櫛枝。
「いやそれは別に構わないんだけど。早くしてほしいというか、俺あんまり金持ってないぞ？」
「え？」
俺の言葉にキョトンとした顔になる櫛枝。いつも破天荒な奴がやると、ちょっと可愛いとか思っちゃうだろ。
「ああ、違う違う。カツアゲとかじゃないから」
なんだー良かった。引っ越してきてそうそう女子高生からカツアゲに合うのかと思ったわー。
「じゃあ何のようで呼び出したんだ？」
「うん、今朝の事でね。比企谷君も気になってるでしょ？あの後何があったか」
正直気になっている。逢坂があんなに素直に謝ってくるなんて思わなかった。
「それじゃ話すね。まずは、そうだね比企谷君が倒れた後、小町ちゃんが急変したんだ」
「小町が？」
「うん。凄く怒ってて、大河もあんなに怒られると思っていなかったみたいで取り乱して、あ、比企谷君を保健室まで運んだのは、あたしとあーみんだよ」
あーみん？誰だよ、あーみん。俺知らないんだけど。
「それでね、あーみんが大河もわざとじゃなくてやり過ぎちゃっただけだからって小町ちゃんに言い聞かせたり、あたしはあたしで大河落ち着かせたり。大変だったよ」
「そうか…」
「でね、ここからが本題。良かったら聞かせてくれないかな？小町ちゃんがどうしてあんなに怒ったのか。比企谷君なら分かるよね？あ、でも無理に聞こうとは思わないから話してくれればでいいよ」
小町が怒った理由は、想像がつく。原因は俺だ。千葉に住んでいた

時の小町ならこの程度の事で取り乱したりしなかったはず。それだけ小町には迷惑と負担をかけてしまっているって事なんだろう。
「そうか、なら頼みがある」
「頼み？あたしに出来る事ならなんでもするよ！」
小町に迷惑がかからず、負担にもならない。そして今回迷惑をかけてしまっているのは何も小町だけではない。櫛枝や川嶋、それに逢坂もそうだ。
「俺と金輪際関わらないでくれ」
「・・・　え？」